

南ドイツ中世都市の商家と奉公人

— ルンティンガー商会を中心に —

山 本 健

はじめに

(1) 課 題

現代社会は、洋の東西を問わず、未曾有の都市化傾向にある。特に1980年代以降の著しい都市化の波は我々の身近な生活空間にまで押し寄せ、産業構造や流通形態のみならず、消費傾向にまで変化をもたらした。このような現代社会の急速な変化を反映して、社会史や家族史が活性化したのと同様に、都市史研究においても、新しい問題意識や斬新な分析視角が提起され、幾つもの重要な業績が出ている。³⁾

本稿で問題とする中世都市の雇用労働の分野でも例外ではない。例えば、①被雇用者をめぐる従来の研究では、ツンフトに組織された技能労働者が分析の主要な対象として取り上げられ、その下に位置づけられていた非技能労働力販売者（ゲジンデ）がいわば排除される形で論じられてきた。これに対して、近年の家族史の成果は、個人の生活サイクルに着目して「ライフサイクルの一環としての奉公人」の存在を明らかにし、都市に関してもそれらの奉公人を組み入れた労働力構造論の再考を促している。他方、②雇主をめぐる従来の研究では、手工業者（親方）の「家」もツンフト規約に拘束される職人や徒弟を抱え込み、一つの完結した生産および消費単位を形成する「全き家」⁵⁾（Das ganze Haus）であったと捉えられていた。これに対して、近年の研究成果では、このような「全き家」を形成したのは少数の上層市民だけであり、多くの手工業者は「通い職人」や臨時の賃金労働者を利用していたとして、従来の雇主の「家」経営の図式に修正を加えている。ただし、上層市民に位置づけられる商人の「家」経営については、依然として「全き家」のモデルが妥当するとされ、具体的な検討は試みられていないのが現状である。⁷⁾

ところで、筆者もかつて中世都市の開放的な性格に着目して、都市に流入し都市内の非技能的な雑業に従事するゲジンデ層を考察する機会を得た。⁸⁾そこでは、

中世都市の雇用労働力が二重構造であることを明らかにした。しかし、史料の制約もあってゲジンデ規定の法理的な分析に留まり、具体的な都市住民の「家」経営における雇用労働の分析を欠いていた。そこで本稿では、M. ミッテラウアーも詳しくは触れていない商人の「家」を対象に、中世後期（14～15世紀）の商家における奉公人の雇用状態および商人の「家」構造について考えてみたい。具体的には、筆者のこれまでの研究対象（南ドイツ＝バイエルン地方）のなかで奉公人に関して豊富な史料を残しているレーゲンスブルク（Regensburg）市を選び、まず、同市の都市構造の分析（第一章）を通して、都市内での奉公人の分布とその意義を考察する。次に、同市の商家ルンティンガー家⁹⁾の雇用状態の分析（第二、三章）を通して、同家でのそれぞれの奉公人の位置づけや雇用労働力の編成などを考察する。

（２）史料について

本稿では、ドイツ中世後期の商家の経済状態を伝えている『ルンティンガー帳簿』¹⁰⁾（以下、『帳簿』と略記）を利用する。これは、南ドイツのレーゲンスブルク市の商人ヴィルヘルム・ルンティンガー（Wilhelm Runtinger）とその息子マテウス（Matthäus）によって1383～1407年まで記された商業帳簿である。同『帳簿』の史料的な位置づけであるが¹¹⁾、これは南ドイツでこれまで伝えられている中で最古の商業帳簿であると同時に、最も内容の豊富な史料でもある。ただし、純粋な商業的記録（商品売買、為替取引など）は史料の半分を占めるにすぎず、残り半分は「家」を中心とした私的記録（医者の助言、家計簿、都市役職就任など）から成る。それ故、史料の編者たるF. バスチアンは史料のタイトルに『商業帳簿』（Handlungsbuch）ではなく、中性的な性格の『帳簿』（Buch）と言うネーミングを採用していた程であった。

ところで、『帳簿』は、ドイツ簿記史の中でも重要な役割を果たしていた。すなわち、『帳簿』は「財産管理の面から使用人の責任の発生と消滅とを対照表示した・・・勘定の発生へ第一歩を示したもの」¹²⁾である。つまり、勘定形式の発現である。ただし、これは未だ複式簿記の形態を採っておらず、15世紀末に完全な

形で現れる複式簿記への橋渡しの存在であった。

- 1) 阿部謹也『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描—』(平凡社、1978年) 阿部氏の中世社会史の方法論については、同「ヨーロッパ原点への旅—時・空間・モノ」(『社会史研究』創刊号、1982年)を参照。
- 2) Mesmer, Beatrix, Familien-und Haushaltkonstellationen:Fragen an die Rechtsgeschichte, in: *Zeischrift für Neuere Rechtsgeschichte*, 6.Jahrgang, 1984,NR 1 / 2 ,S. 1 ~18.三成美保「西欧前近代の家族に関する研究の現状」(『法制史研究』38号、1988年)などを参照。
- 3) 森本芳樹編『西欧中世における都市＝農村関係の研究』(九州大学出版会、1988年)、清水広一郎『中世イタリアの都市と商人』(洋泉社、1989年)、同「都市民の世界—公証人文書にみる中世都市ピサー」(二宮宏之編『深層のヨーロッパ』山川出版社、1990年)
- 4) Berkner,Lutz K.,The Stem Family and the Developmental Cycle of the Peasant Household: An Eighteenth-Century Austrian Example, in : *American Historical Review*, vol.77,No. 2 ,1972.,P.ラスレット著、川北稔他訳『われら失いし世界—近代イギリス社会』(三嶺書房、1986年)、Mittelauer, Michael, Familie und Arbeitsorganisation in städtischen Gesellschaften des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, in : A.Haverkamp (Hrsg.) *Haus und Familie in der spatmittelalterlichen Stadt, Koln-Wien* 1984, S. 18-19.
- 5) O.ブルンナーのいう「全き家」とは、家計と経営が未分離で消費と生産が同時に行われる総体としての家である。この社会形態は、もともとは農業的諸関係のもとにおいてのみ存在するが、都市で商工業を営む住民の多くも「全き家」のなかに生きていた、とブルンナーは述べている。O.ブルンナー著、成瀬治他訳『ヨーロッパその歴史と精神』(岩波書店、1974年) 151-189頁、VI論文「全き家」と旧ヨーロッパの「家政学」
- 6) Mitterauer, op.cit., S. 9-10.
- 7) イタリア中世史においては、すでに清水広一郎『中世イタリア商人の世界』(平凡社、1982年)および同『イタリア中世の都市社会』(岩波書店、1990年)を参照。
- 8) 拙稿「中世都市ゲジンデの諸相」(川口博編『伝統と近代』、彩流社、1988年)および、拙稿「南ドイツの中世都市法にみる『市民社会』の構造」(『西洋史学』131号、1983年)。なお、ドイツの奉公人の歴史的変遷については、若尾祐司『ドイツ奉公人の社会史』(ミネルヴァ書房、1986年)を参照。
- 9) Eikenberg,Wiltrud, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, Göttingn 1976. 松田絹「ルンティンガー家の企業経営」(『経済と経営』札幌大学、第8巻3・4号、1978年)をも参照。

- 10) F.Bastian (Hrsg.) *Das Runtingerbuch 1383-1407 und verwandtes Material zum Regensburger-südostdeutschen Handel und Münzwesen*, 3 Bde., Regensburg 1935-1944. 以下、RB.と略記する。
- 11) Eikenberg, *op.cit.*, S.1-11.
- 12) 井上清『ドイツ簿記会計史』（有斐閣、1980年）5－6頁。

第一章 レーゲンスブルク市の住民構成と 都市奉公人の分布状況

(1) 14世紀レーゲンスブルク市の都市状況

まず、レーゲンスブルク市の政治・経済状況を概観しておく。レーゲンスブルクは、バイエルン地方のドナウ河とレーゲン（Regen）川との交差する地点に位置し、ローマ時代の都市集落（civitas）を基にできた都市である。ここには、バイエルン大公が代々居住し、都市領主として君臨していた。他方、聖界側では、例えば聖エメラム修道院を、また聖ボニファティウスが司教聖堂などを相次いで建立することによって、司教都市としての色彩を強めていった。したがって、レーゲンスブルク市には聖（司教）と俗（大公・国王）の二人（ないし、三人）の都市領主が相対立しながらも併存していた。同市はこれら領主の保護のもとで商業を発展させ、12～13世紀には南ドイツだけでなく、ヨーロッパの遠隔地商業の中心地として、繁栄した。こうした商業の発展に伴って経済力を身につけた市民は、上記の世俗領主と司教との対立を利用して、多額の資金援助と引換えに、1245年に市長（Bürgermeister）と市参事会（ラート/ Rat）を選出する権利を獲得した。さらに、同市は皇帝に直属する資格や帝国自由の獲得にも成功して、帝国都市になった。¹⁾

本稿が対象とする14・15世紀交は、アウクスブルクの「フッガー家の時代」²⁾より少し前の、同市がまだ遠隔地商業の中心地の座を隣接するアウクスブルク市やニュルンベルク市に奪われていない時期である。この時代までに商人を中心とした市民はさらに、都市裁判権、徴税権、貨幣鑄造権など広範囲な自治権をも手に入れ、³⁾家人（ミニステリアーレス）を母体にして市政を掌握していた都市貴族と激しく対立しだす。遠隔地商人や金融業者を中心とする新勢力と都市貴族たる家人勢力との対立は、1330～1334年のアウエル事件⁴⁾（Aueraufstand）で頂点に達する。この騒動で勝利を収めた商人を中心とする市民たちは、家人層に代って新しい都市指導者となり、都市貴族の地位をも占めた。この新しい都市貴族層は、かつてのそれと異なり、決して閉鎖的な性格のものではなかった。市民は自己の経

経済力と政治力によって市参事会や都市官職に就くことが可能であった。また都市住民の間では水平・垂直二方向での社会的流動性 (Social Mobility) がみられ、手工業者から商人へ、さらには都市貴族へと上昇する者、また市外から来た外来者 (遍歴商人など) がその卓越する経済力や都市貴族との結婚などを通して、都市貴族になる者も現れた。⁵⁾

このように、14世紀のレーゲンスブルク市では市民的自治を基盤として、同市は経済的な繁栄を極めた。この繁栄は1370年の租税台帳⁶⁾にみられる住民の多様な職業からも窺われる。そこで、次節では、同市の特定地区を取上げ、そこでの住民構成や職種などの検討を通して、同市の都市構造上の特徴を明らかにする。

(2) 各地区の住民構成と都市機能

14世紀に広範囲な自治権を獲得したレーゲンスブルク市では、市民たちが都市域を八つの地区に分けて市政の効果的な運営に努めていた。⁷⁾ 八つの地区⁸⁾とは、西側から1300年頃に新市壁の建造によって都市域に組み込まれたヴェストナー (西) 地区 [A]、その東に隣接し、920年頃に市壁で囲まれた新市街区域内の四つの地区<すなわち、ドナウ河に面したドナウ地区 [B]、その南のシェーラー (織物裁断工) 地区 [C]⁹⁾、聖エメラム修道院近くのヴィルトベルカー (毛皮職人) 地区 [D]、石造りの橋を有するヴットマンガー (木材商人) 地区 [E] >そして旧市街の二つの地区<すなわち、ヴァーレン (イタリア商人) 地区 [F] とパウルサー (聖ポール) 地区 [G] >そして最後に、東側に位置するオストナー (東) 地区 [H] である。— ([A~H] の各地区の位置については、図1を参照) —

これらの地区はそれぞれ、徴税請負や防衛の単位であり、また末端の警察および消防機能をも担う、いわば市政の最下部の行政単位でもあった。しかも、そこには一人の代表 (区長) のもとに住民集会が開催され、様々な問題が議論されていた。¹⁰⁾

ところで、このような地区には具体的にどのような住民が居住していたのだろうか。この問題に対する手掛かりは、各地区に割り振られた租税の徴収台帳である。上記の八つの地区のうち、1370年の租税台帳からは、[A]、[B] そして [E]

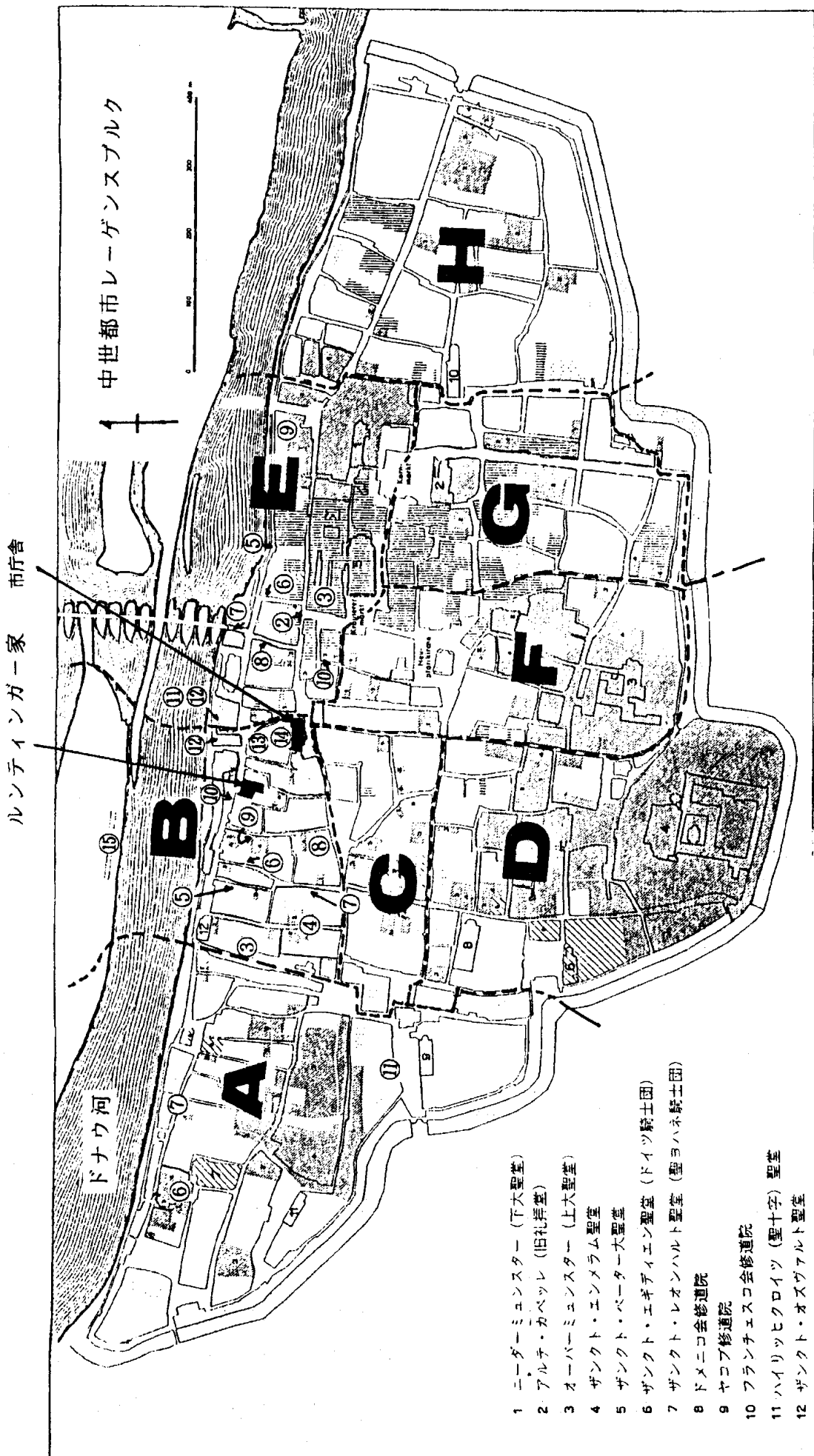


図1. 中世都市レーゲンスブルクと居住地区

〔典拠〕R. Strobel, Das Bürgerhaus in Regensburg, 1976. より作成。

の、いずれもドナウ河に面した三地区の担税家屋とその居住者が判る。

表1～3は、これらの三地区の住民構成の特質を概観するために作成したものである。

まず、住民たちの職業から窺える各地区の特徴は次の点である。

第一に、同市のドナウ河船着き場を備えたドナウ地区[B]＝[表1]には、多数の代書屋（公証人）[9名]および飲食業関係者（調理人、給仕、女給、漁師）[10名]が集中し、また運送業者、馬方や馬具師それに鍛冶工・商人・関税吏などが居住している。この者たちの存在は、同地区に位置する市庁舎や市場などを考慮に入れると、例えば、船や筏で商品を携えてきた外来商人との商取引に関与する代書屋（公証人）と関税吏、外来者が持ち込んだ商品を商う商人、さらに外来者に歓待（飲食・接待）を提供する飲食業関係者、船着き場から市場へ商品の搬入・搬出に関与する運送業者そして運送業者の馬やラバの蹄鉄の打ちかえなどにも深い係わりを持つ鍛冶工などの経済活動を連想させる。すなわち、同地区は外来者などを相手に活発な商業活動を受け持つ商業地区であった。¹¹⁾

第二に、ドナウ地区の東に隣接し、石橋を有するヴットマンガー地区[E]＝[表3]には、多数の飲食業関係者[8名]、および浴場主[4名]が集中している。また古着商、雑貨商、理髪業者の存在などからも、同地区は、ドナウ河に架かる石橋を渡って都市に来る外来者などを対象に食事・入浴などの提供や医療行為を通して、また古いマットレスなどの寝具類や小間物などの賃貸・販売を通して、商業・宿泊・医療機能などを担っていた。

これに対して、ヴェストナー地区[A]＝[表2]には、ビール醸造業者[4名]が集中している。その他には、市民の日常生活に必要な各種の職人たち（肉屋、大工、石工、皮革工、錠前工、織布工、仕立て屋、木靴工、手袋製造工など）が居住している。このように同地区は、おもに都市住民を相手に日常的な生活物資を生産・提供する手工業地区であった。

以上から、同市内の各地区は、その都市空間的な配置状況を反映して、各地区に特有な職種およびそれに基づく異なる都市機能を備えていたことが判る。

ところで、地区の住民層の家に目を向けると、各地区の違いが一層明確になる。

表1. ドナウ地区〔B〕の住民構成とその職種

〔典拠〕RUB. Bd. II, S.360-361. より作成。

通り	家 主		住 人 (借家人)			奉公人	
	氏 名	職 種	氏 名	職 種	妻 子 供	男 子	女 子
①	都市領主		• Heinrich		○	2	
②	• Ruger	鍛冶工	• Elspet Rugerin			①	
	• Trainer		[Chunrad]				
③	• "		[Pesel]			①	
			※Tannerのdienner				
	• 都市領主		• Els=Fuchsenの姉妹				
			• Wydenman				
			• Ulr.				
			• Eberhart				
			• U. Frey				
			• U. Eysmeyn				
			• Frid.				
			• Chuntz				
			• der gut Hainreich				
			• Hainr.				
			• Pyderman				
			• Hans=Volkchmarの息子				
			• Ch.Paurer		○		
			• Chiener	魚 屋	○		
	• 司 祭		• R.Prukkner			3	
			• Lyebhart	手袋職人	○		
	• Wirnt Awer		☆		○ Pl.	1	Pl.
④	• H.Lerchenveller		☆				
	• A.Gebelchofer		☆		Pl.		
	• S.Spiegel		☆		○	2	
	• Pulnhofer		• F.Entzengruber		○	1	
	• Chohnpekchen 司祭		空き家				
	• Gotschalchinn von Strawbing						
	• New Spitalの司祭		空き家				
	• H.Pub				○		
	• Weissen Bruder						
⑤	• Spptal		• H.Fludrer		○		
	• L.Weispekchen		• H.Weispekchen		○	1	1
	• Megenberch		• Chunr.	仕立屋	○		
			• Rotel		○		

	• Getzen	• M. Leblynn • Irmgart 女 給	
	• St. Albanの司祭		Pl. Pl.
	• Schirrsetzzer	空き家	
	• Gravenreuter H. Rokkinge の許に	• Agnes • Ch. Chaufel	1
	• Zeller	• U. Sunchinger ○ • Frid. 楽隊屋 ○ • F. Lon • Getz 浴場従業員 ○ • H. Leinwurffel ○ • Herttel omer ? ○ • Harderinn	
⑥	• S. Tundorffer 領主	• Ann di Meringern	1
⑦	• Graflaublinn	• H. Puhler ○	
	• A. Taucher	[Marttein. Dyemut] • Stainchircherynn	① ① Pl.
	• O. Woller	☆ ○	
	• Oberhoferin	• Symonynn	1
	• Dryhauppel	• Otto 大 工 ○ 彼の兄弟 Perchtolt • Perchtolt 運送業者 ○ • C. Parchsteter di Puchvellerynn • H. Reinger ○	
	• Durnsteter 助任司祭		
	• G. Choler	• H. Zeller ○ • Ch. Grumat • Ch. von Lu ○ • Ulr. 商 人 ○	
	• Frumoldynn	• D. Ziecher	1
	• F. Durnsteter	☆ ○ Pl. H. Aelnpekch 代書人	5 3
⑧	• Frumolkynn	• R. Ruythartter ○ • Hartweig 織物商 ○	
	• "	• U. Stegner ○ • H. Poschendorffer ○ • Percht [Frid.] ○ ※ Gravenreuter の diener • Ulr. 代書人 (Porttner家の代書人) • H. 代書人 ? [Hans]	① ①

• Porttner	• Rindel omer ? di Lukchynn • Hans Tundorffer • Hay. Tundorffer • Ulm. 代書人 [Fri.]	①
• Techpeter (Seyfrid と Jacob 兄弟)	☆	3
• J. Wyllden	• Nycla 毛皮仕立工 ○	
• M. Reuter	☆ Ulr. (義理の息子) ○ • H. Raussinger	2 1
• Gravenreuter	• Ludwieig 馬具師 ○	
• "	• der swartz Hainr.	
• Ch. Hofmapster	☆ ○ 1 • Hiltprant 代書人 [Lyenhart] 家事奉公人 • Chunrat 調理人 [Herttel] 調理見習い	① ①
• Trayner	• Mirttel 調理見習い	①
• Hasmekchen	[Chungunt]	①
• H. Smautzel	☆ 彼の母 ○ • di Velkchlinn • Wolfel 酒場の給仕 [Ruger] • Elspet	①
• Engelmar	• Gotz • Ulr. 代書人 [H. Ch.] • Ornolt 調理人 • Ulr. 家事奉公人 [Agnes, Chungunt, Chundel]	② ① ③
• Horndler	[Hans] ※Satler の diener • Frid. Mulbekch ○	①
• Otto Graner	☆ ○ Pl. • Ch. Pfaffenhofer • Engelbreht • Ch. 代書人	2

		<ul style="list-style-type: none"> • H. 代書人 • Volkchel ワイン販売人 • Ulr. 給仕 • Eberl 馬丁 • Hans 馬方 • Ulr. Pawman 馬方 • T. Rudel 馬方 • Schottel 調理人 • Wambaser • D. Chätzlynn • di alt Alhait 	
⑨	• Ulr. Chratzzer	[Markchart] • Ulr. 調理人	①
	• Graner	• Hainr. 司祭の従者 • Glatzzel 司祭の食料品保管係	
	• Lautterbekchinn	• G. Peckch	
	• H. Taucher	[Ulr.]	①
	• Gundoltzhausen	Undernagel の許に • Oerndel 雑貨商 ○ 1	
⑩	• E. Leutmann	[Alhait, Ch.] • Ann di Fremelspergerinn	① ①
	• Leutwein	• R. Hirtt ○ • W. Dreyschillinch ○	1
	• Leutwein	☆ Pl. • Jobs 代書人	1 1
	• Auf dem Turn	• Getz omer? 1	
	• Rontinger	• Frid.	2 1
	• Ch. Zant	• Perchtolt ブドウ園主	1 1
	• Zand	• M. Sweykker ○ • M. Pot ○ • Irngart di Paulserinn	
⑪	• O. Lautterchofer	[Els]	①
	• ? 関税吏	• Katrei 女関税吏	
	• Gebhart 金物商	☆ ○ • M. Toldynn • Ch? Fridlynn とその姉妹	
	• H. Osten	☆ ○ • M. H. とその兄弟 • Ulr. Snell ○ • Sappwl ○ • R. Rorbach ○	

	• Peukchaymer	• H. 代書人 [Marg.]	①
	• Auf der Gantzen	• P. Schuler ○	
	• Ch. Schambekch	[Ch.,H.] ※Durnsteterのdiener, dienerin	① ①
	• Mirbot 金物商	• Frid. Mayr ○	
⑫	• H.=Hirtten の息子	• E. Willd	
	• Chumtewr v. St. Gylgen		
	• Aygelspekchenの息子	• Alherttel 毛皮工	
	• Ch. Smerber	☆ 1	
	• Pfilippen 毛皮仕立工	[Ulr.]	①
	• Hahlinger の息子		
⑬	• G. Peter ワイン小売人	• Chetzel	
		• Pokcher	
⑭	• H. Lade	☆ ○	
		• Frid. Pramer ○	
	• Totenakchrer		
	• M. H.	☆ ○	
⑮	• Markchart	• Chalhoch ○	1
	• Alb. Dorn	☆ ○	
	• Leublynn/M. Wakcherstainer		
	• R. Sekcher	• Frid. ○	

〔注〕 ☆=自宅

②=diener/dienerin の独自の借家住い。

その数字は人数

{ } =その diener/dienerin の名前

Pl=複数の人数

※ 以上の表記は、表 2、表 3 でも同じ。

〔通り名〕

- ① An dem Rynderpuhel
- ② Vor Purch
- ③ Auf dem Graben u. bei den gewelb vor Purch
- ④ Engelpolt Str.
- ⑤ Vor st. Alban u. Metgeben Str.
- ⑥ St. Alban Str.
- ⑦ Awer Str.
- ⑧ An der Haid u. in der Grub
- ⑨ Zandinn Str.
- ⑩ Donau
- ⑪ An dem Eisenpuhel
- ⑫ Vor den Fleischtischen
- ⑬ An dem Martt
- ⑭ Hinter dem Rathaus
- ⑮ Obern Wird

表2. ヴェストナー地区〔A〕の住民構成とその職種

〔典拠〕RUB. Bd. II, S.361-363より作成。

通り	家 主	住 人 (借家人)	奉公人
	氏 名 職 種	氏 名 職 種 妻 子供	男子 女子
①	• F. Choferl	☆ • U. Choferl	○ Pl.
	• U. Schraffel	• 空き家	
	• F. Choferl		
	• P. Newmaister	☆ • 間借り人 = Elspet	○ Pl.
	• Heil 陶 工	• ☆	○ Pl.
	• O. Veter	☆ • I. Vetrinn	○ Pl.
	• H. Sauberl		
	• H. Oeder	☆	○ Pl. 1
	• O. Prenner	• Ch. Eschhay • Bi Ortlib Gluthafen • Albl. Hayden	○ Pl.
②	• Chumer	• U. Oeder (義理の息子)	1
	• H. Schirndorffer	☆ • Eberl (間借り人)	○ ○ Pl.
	• Auf dem Turn	• Ch. 都市領主の従者	○ Pl.
	• Gerunkch ビール製造業者	• U. Gerunkch	○ Pl. 1
	• O. Oetershausen	☆	○ Pl.
	• Pferinger	• A. Saner	○ Pl.
	• Pawrn 皮革工	[Ch. Swartz] ※ Peter の dienerin	①
	• in padstuben	• Merbot 浴場主 • H. Spitz • Chunr. 手袋職人 • L. Pehaim • Fridr. 引船人夫	○ Pl. ○ Pl.
	• Auf dem Turn	• Albr. 木靴工 • A. Auzpurkch	○ Pl.
	• L. Cheschinger	[Alhait]	①
	• Teinvelder	• U. Aychgeruter	
	• Hansen 染色工	• M. Model • Margret (間借り人)	○ Pl.
	• Woller	• U. Chelhaimer	○ Pl.
	• Hansen 皮はぎ職人	• Ch. Pawer	○ Pl.

	• Gemandel	• Elspet • O. Sigel ○	1
	• Fr. Goldner	☆ • Chunr. ワイン販売人	
	• Ch. Reinhauser	☆	1
	• Graner	• W. Hedrer ○ Pl.	
	• Ulr.	• Elspet 洗濯女	
③	• Ch. Cheiffel	• Fr. Gaissel ○ Pl.	
	• Ch. Pechrer	☆ ○	
	• Chunrat 行商人	☆ ○ Pl.	
④	• Reichen	• Ch. (未亡人) • Ramel ビール製造業者 1	
	• Hansen 大工	• Hainr. 袋物業者 ○ Pl.	
	• Otto 羊飼い	☆ ○ Pl.	
	• Frid. 仕立て屋	• Chunr. ビール製造業者 ○ Pl.	
	• Lader	• U. Mantler ○ Pl.	
	• Reichen	• H. Eyban ○ Pl.	
	• P. Chlosner	☆ ○ Pl.	
	• Frumoltinn Reiche	の許に • Hainrich 皮はぎ職人	
	• Walchinn	• Katerey (未亡人)	
	• Ch. Hofmaister	• Seidel Pl. [Dietel]	①
	• D. Hornbekchinn	☆	1
	• Haugel 織布工	• W. Stur • Chr. Edelprunner ○ Pl. • U. Gretzer ○	
	• Maulpekchen	• Ch. 帯製造業者 ○ Pl.	
	• New Spital の hof	[Chunigunt]	①
	• Stauff 司祭	• Erspet Schonnoferinn die Gatschnerynn	
	• Ulreich 肉屋	• Marchart 仕立て屋 • Ulr. Premier ○ Pl.	
⑤	• Ulr. 司祭	• Hilprant 織物製造業	
	• Ch. Snabel	• A. Aczagel • F. Chumscher	
	• Ch. von Tawerling	• U. Maul die Reiberinn • E. Stanglinn	
	• H. Smotzler	• H. Perkchhaimer	

	• P. Leubel	• U. Prantel • N. Lainer • J. Gitschinger • N. Schabab • Steffel 縮絨工	
⑥	• St. Lyenhart	• Ch. Unsit	
	• Frid. v. st. Giligen	領主 • Hainr.	
	• v. Salach の司祭		
	• Ch. Pawr,	☆ ○ Pl.	
⑦	• O. Untel	☆ ○ Pl.	
	• Meindel 皮革工	☆ ○ Pl.	
	• A. Salmann	• U. Lerchnfelder	
⑧	• Ch. Musser	• Chunr. 手袋製造業者 • Leupolt (間借り人) ○	
	• H. Moltel	空き家	
⑨	• U. Woller	• Aerdinger [Hainr.]	①
	• G. von Oeting	• Chunr. 廷吏 ○ Pl.	
	• P. Stab	[Herman] • Ott 仕立て屋 [Jacob] [Andre, Peter] [Chunigunt]	① ① ② ①
	• H. Oler	[Chunigunt]	①
	• C. Jeusinn	☆	
⑩	• Zotmar	• Chlaus (息子) • Chuntz 陶工 • Ch. Lauterbach [Hainr., Utz] ※ Schefel の diener • Matzlautrinn	②
	• Notangst	[Elspet] [Empel] • H. Zeller	① ①
	• Amman	• E. Sallerinn	
	• Jacob ビール製造業者	• Hainr. 石工 • Elspet 女給	
	• Graner	[Albrecht, Perchtolt] • Chunr. (Wogner の兄弟)	②
	• ?	• H. Reinger ○	2 1

⑪	• M.Geisenvelderinn	☆ • T. Uppchofer • M. Paschingerinn • E. Geisenvelder ○ • I. Raigrinn [Ludel]		①
	• Auf dem purgtor	• Ulr. 錠前屋 ○ • U. Pentzchofer ○		
	• auzzern turn	• U. Erlinger ○		
⑫	• Sager	• Perchtolt 袋物製造業者		
	• Ze Oedenhofen	• von Chunigwisen (未亡人) Pl.	1	
	• mitten turn	• A. Noll Pl.		

〔注〕

〔通り名〕

- ① Prenbrunn
- ② Innerhalb des Burchtor
- ③ Unter den Chuffern
- ④ Auf dem Graben
- ⑤ Ellen Str.
- ⑥ Hinter st. Lienhart
- ⑦ Unter den Ledrarn
- ⑧ An dem andern gang auf Hul
- ⑨ Ornoltzwinkchel
- ⑩ An dem andern gang vor Purkch
- ⑪ Vor st. Jacob
- ⑫ Vor dem Purchtor

表3. ヴットマンガー地区〔E〕の住民構成とその職種

〔典拠〕RUB. Bd. II, S.363より作成。

通り	家主	住人（借家人）			奉公人	
	氏名 職種	氏名 職種	妻	子供	男子	女子
①	• H. Riethaimer	• J. Riethaimer	○	Pl.	3	2
		• H. Huber	○		2	
	• Taucher	[Margret]				①
	• Ulr. Ingolsteter	[Hans]			①	
	• H. Enynchel		○		1	
	• Pferinger	[Prawn]			①	
	• Lertner	[Elspet]				①
	• Dofringer	[Albr.] Ein（間借り人）			①	
②	• Pischhofhof	• M. Hainr. 仕立て屋	○	Pl.	1	
	• J. Wilden	• F. Gremolt				
		• Vindel 給仕			①	
		[Chunr.]				①
		[Chunigunt]				
		• Ch. Slampperl				
	• Churtzlinn	• Elspet 女給				
		• Erhart 雑貨商	○			
③	• H. Schiferl	[Chunr.]			①	
		• Metel 理髪師	○			2
	• Gratzman	[Elspet]				①
	• H. Schaidreisser	• L. Probst	○			1
		[Fridel]			①	
		• R. Waiter				
	• H. Perger	• Heinr.（兄弟）				
		• H. Charl	○			
③	• Notscherf	• C. Moschler				
	• J. Metem	☆	○	Pl.	1	
		• Wilhalm	○			
	• Fri. Uelnchofer	• Paul ワイン小売商	○		1	1
	• Weichpischhof	• Ch. Woger	○			
	• H. Zappfner	☆				
	• Alten Pischhofhof	? 女給 ※彼女は Zaitzchofer に所属 • Werndel 塗装工 • Perchtolt 関税吏 • Frid. Pekchinn • Matz	○ ○	Pl.		

④	• Hofmaister	• Elspet die Rosnerinn • Irmgars • Hainr. 浴場主 ○ • A. Gozzlinn	1
	• Pfister	• Christein 納室係	
⑤	• 司 教	• Charl 製粉業者 ○ • Albrecht 仕立て屋 ○ 1	
	• F. Strantz	• Chunr. v. Munchen ○	
	• H. Pfaff	☆ ○ Pl. • Perndel 製粉業者 ○	
	• Auf dem Turn	• Mertel 領主の従士 Pl.	
	• Rokkinger	[Ulr., Jacob] • Rupprecht 領主の従士 ○	②
⑥	• U. Woller 浴場主	• Hainr. 浴場主 ○ • Hainr. 引船人夫 ○	
	• L. Weispekchen	• H. Ruppel 酒場の給仕 • H. Zehentner • Elspet v. Chelheim • L. Munich	
	• H. Reindel	• Ch. v. Amberkch • Ch. v. Opperstorf	
	• 浴 場	• Dietreich 浴場主 ○ • Lautel 引船人夫	
	• Ulr. Wisent	☆ ○ Pl.	1 1
⑦	• C. Chunigswiser	[Alhait] • Thomel 調理人 ○	①
	• Hartlein 関税吏	[Fridr.] [Kunigunt]	① ①
	• Piber	• Chunr. 筏 師 ○	
	• Auf dem auzzern Turn	• Thome ○ • Ch. Plank ○	
	• Steinsperger		
	• Hirtten の子供	☆	
	• Rausinger の子供	☆	
⑧	• Perchtolt 塗装工	[Wernel, Hansel]	②
	• Notscherf	[Portzel, Weigel, Hirsawer]	③
	• Tinzinger	[Heinr., Thomel]	②
	• Notscherf	• E. Wirder ○ Pl.	1
	• 橋	• N. Notscherf ○ Pl.	1

⑨	• M. Lorbirerinn	☆		1
		• H. Pfaffenhofer	○	
	• Pareuter	• Reichel	○	
		[Ann]		①
	• st. Margreten の司祭			
	• P. Rokkinge	☆	○	
⑩	• U. Reichel			
	• Portner	• Ch. Newnburger	○	
	• Grafnreuter	• U. Chumerl	○ Pl.	
		• Ch. Newnchircher	○ Pl.	
		• Ch. Wetzel	○	3
	• Ch. Reichel	☆	○ Pl.	
⑪	• Jorg 鍛冶工	☆	○	1
	• Ch. Notscherf	☆	○	1
		Ann (Notscherf の姉妹)		
	• Charl 綱製造工	[Wolfel]		①
		[Margret]		①
		• Wolfel (Peter 代書人の息子)		
⑫	• 屠殺場の中	• F. Hobsch	○ 4	
		• H. Gerstenhaupp		
	• A. Unruchel	☆	○ Pl.	
		• Albr. 金物商	○	1
		• Chuntz 古物商		
	• Sudelhof	[Plutwurstel]		①
⑬	• H. v. Ofensteten	• A. Charlinn		
	• H. Smerber	☆	○ 1	
	• Ch. Sechsew	☆	○	
	• Vokchen	• Fr. Laidel	○	
		• N. Laidel		
		• U. Sechsew		
⑭	• Ch. Chropf	☆	○	1
	• R. Jeus	☆	○	
		• Ch. Vokchel		
	• Ch. Tapfhaymer	☆	○	
		• H. Tapfhaymer		
	• H. Rauscher	☆	○	1 1
⑮		• Marttein 貨幣鑄造工	○	
		• Markcheltrager	○	
		• Ott 納室係	○	
		• Ann (雑貨商の娘)		
	• J. Paulser	☆	○	
		• Hahlinger の子供		

⑭	• Ch. Tossel	• Chunrat (弟)	
	• Engelpreht	• H. Pfadlater ○	
⑮	• Marchpekch	☆ • Dyemut 女 給	2
	• A. Woger	☆ ○ • J. Nynderthaymer ○	1
	• Hartman 呉服商	• Ull 調理見習い [Hansel]	①
	• Saylerwekch	[Elspe]	①
	• Porttner	• Lyebhart 酒場の給仕	

〔注〕

〔通り名〕

- ① ?
- ② Auf der Obs
- ③ Hinter des Bischofhof
- ④ Pfaffenhofen
- ⑤ Auf den Stekchen
- ⑥ Rostrenkchen
- ⑦ Vor Brukk
- ⑧ Brukstr.
- ⑨ Vor st. Jorgen
- ⑩ An der Witwend
- ⑪ Hinter den Fleischtischen
- ⑫ Unter den Fleischtischen
- ⑬ An dem Smerpuhel
- ⑭ An dem Martt
- ⑮ Hafnerstr.

それは、各地区の住民の子供の数である。つまり、都市の中心部に位置し、かつ商業地区であるドナウ地区 [B] とヴットマンガー地区 [E] では、家持層であれ借家層であれ、子供の数が著しく少ない（あるいは単に同居していないのかは不明）。これに対して、周辺部（ヴェストナー地区 [A]）では両層とも複数の子供がいる。この相違が具体的に何に基づくのかは不明だが、商業地区と手工業区での「家」の在り方の相違によるのではないだろうか。

（３）各地区での都市奉公人の分布状況

上記した各地区の都市機能の相違、さらに各地区での子供の数の違いは、同市の奉公人の在り方にも影響を与えていた。まず、都市奉公人の分布であるが、奉公人の数は都市中心部（[B] = 73人 [E] = 63人）に集中し、周辺部（[A] = 31人）と比べて二倍強に達している。さらに、中心部のドナウ地区 [B] 内でも、船着き場に接しているドナウ街区 (⑩) や市場が開催されるハイド＝リューブ街区 (⑧) に男子奉公人が集中している。ヴットマンガー地区 [E] 内では、石橋の手前 (⑦) とブリュック街区 (⑧) そして市庁舎前の市場に通じるヴットベンド街区 (⑩) に男子奉公人が集中している。このように、まず、中心部の商業地区に、しかも特定（商業）街区に奉公人が、しかも男子奉公人が集中している傾向が窺える。

次に、男子奉公人と女子奉公人との比率は全体で、男子が女子の1.5倍 (103/65) と高い値を占めることなども判る。また、これらの表からは一応奉公人の有配偶率が低かったことも連想される。しかし、奉公期間があくまで「個人のライフサイクルの中では一時的な期間」であるという最近の研究成果を考慮に入れるならば、奉公人は決して生涯にわたって独身のままでいたのではない。既婚奉公人もかなりの数、存在していた。

ところで、都市内の中心地区と周辺地区の「家」をめぐる大きな相違点は、中心地区の「家」では子供の数が少なく、それを補う形で多数の奉公人が存在していること、また周辺地区の「家」では複数の子供がおり、奉公人の数が少なかった、という対照的な図式の中に見て取れる。この対照的な相違は、すでに見たよ

うに、中心地区が商業地区であり、同地区の商家の子供たちは商業的技能を磨くために「家」の外に出ていた、との想定が許されるならば、各地区の産業構造の違い〔商業vs手工業〕を反映したものであろう。また子供の数に着目すれば、周辺地区は、都市周辺の農村部と並んで、奉公人を中心地区（商業地区）へ送り出す供給源であった、とも考えられよう。

そこで、次章では、都市中心の商業地区（ドナウ地区）のドナウ街区に居を構え、奉公人を雇用して遠隔地商業を営んでいたルンティンガー（Runtinger）家を取り上げ、その具体的な分析を通して商家での奉公人の在り方を検討する。

- 1) M.Spindler (Hrsg.) *Bayerischer Geschichtsatlas*, München 1969, S.122-123. Schmid, Peter, Die Anfänge der Regensburger Bürgerschaft und ihr Weg zur Stadtherrschaft, in : *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte*, Bd.45, Heft 3, 1982, S.483-539.
- 2) 諸田実『フッガー家の遺産』（有斐閣、1989年）
- 3) Bosl, Karl, *Die Sozialstruktur der mittelaltelichen Residenz-und Fernhandelsstadt Regensburg*, München 1966, S. 87-93.
- 4) *ibid.*, S. 86-89.
- 5) *ibid.*, S. 101.
- 6) *Monumenta Boica*, Bd.54, *Regensburger Urkundenbuch*, Bd. 11, (以下、RUB. 11. と略記) Nr. 906 (1370), S. 360-364.
- 7) Bosl., *op. cit.*, S. 92.
- 8) Walderdorff, Hugo Graf von, *Regensburg in seiner Vergangenheit und Gegenwart*, Regensburg 1896, S.112-113. Strobel, Richard, *Das Bürgerhaus in Regensburg*, Tübingen 1976, Falttafel 1.
- 9) 1376年の租税台帳からは、シェーラー地区〔C〕のうちのヴァハ街区（Bachgasse）の担税家屋とその住民が判る（前掲拙稿「南ドイツの中世都市法にみる『市民社会』の構造」、48頁）。
- 10) Strobel. *op. cit.*, S.13-15.

- 11) このドナウ地区は、外国人を相手とする商業地区である点で、清水広一郎氏
が取り上げていたイタリア中世都市ピサの聖堂区キンツィカ（前掲「都市民
の世界－公証人文書にみる中世都市ピサ」）と類似しているように思われる。
比較考察は今後の課題とする。なお、ロシア中世史の分野では、すでに松木
栄三氏が街区に焦点を合わせた成果（「16世紀ノヴゴロドの都市住民と地域
共同体」『歴史学研究・増刊号』No.547,1985年）を表わしている。

第二章 ルンティンガー商会と奉公人

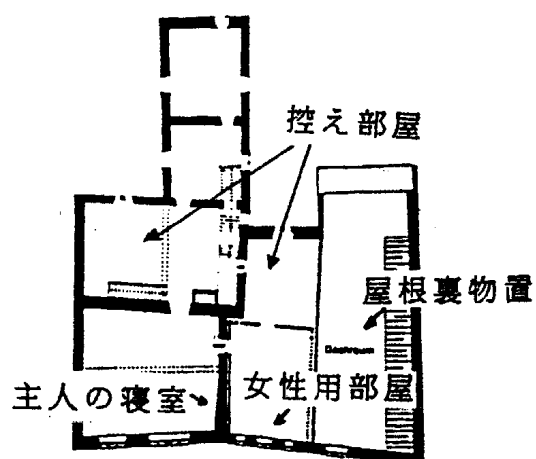
(1) ルンティンガー家とその商業活動

商業地区（ドナウ地区[B]）に居（図2）を構え、14・15世紀交（1383～1407年）に貴重な商業帳簿を残したルンティンガー家とは、どのような「家」であり、また商業都市レーゲンスブルクでどのような位置を占めていたのであろうか。

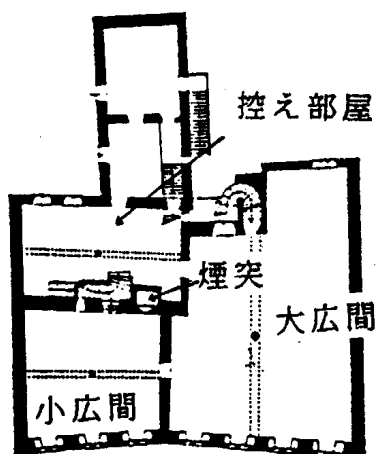
1383年の納税者名簿によると、ヴィルヘルム・ルンティンガーは同市で4番目の高額納税者であった。また同年、息子のマテウスが対ブラバント交易に出資した金額2800グルデンGuldenは、当時、ハンス・フッガーがアウクスブルク市に納税した際の全財産の約二倍に当たる金額であった。また、1390年の同家の全財産は約18000グルデンに達し、レーゲンスブルク市で最も富裕な商家であった。¹⁾

ところで、ルンティンガー家はレーゲンスブルクに古くからある都市貴族の家系ではない。アイケンベルクによれば、²⁾同家で初めて史料に市民（Bürger zu Regensburg）として現れる人物は、1347年および1349年のアルプレヒト Albrechtとヴィルヘルムの兄弟である。また、1350年4月にヴィルヘルムが同市の都市貴族レーベル家 Löbel から果樹園を購入したという記録がある。さらに、1352年には、かれが同市の隣村 Dechbetten の代官職と裁判官職（Vogtei-und Richteramt）に就任していたとの記録もある。これらの点から同家はこの当時すでに、かなりの経済力を備えていたことが判る。なお、アルプレヒトは、1357年の彼の遺言状から、富裕なワイン商人であった。³⁾

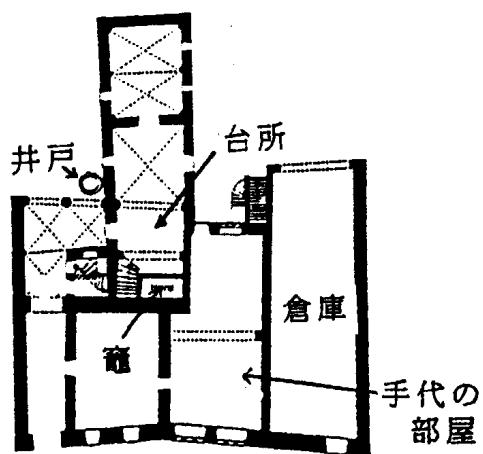
ヴィルヘルムは、1350年に古くからの都市貴族レーベル家の一人娘ベルタ Berta と結婚した。前述の果樹園と官職はもとはレーベル家のものであった。⁴⁾彼は結婚を境に徐々に都市官職を得ていったらしく、1357年には参事会（45人衆＝ラート）の証人や陪審員として登場している。そして、1367年には、ドナウ地区（ドナウ街区⑩）に一軒目の家（図2）を購入している。⁵⁾このような事実を考慮すると、アイケンベルクが主張しているように、ルンティンガー家は、市内の小商人から身をおこしたのではなく、すでに裕福な商人として同市に移り住み、地元の都市貴族との結婚などを通して市内の有力者（旦那衆）としての地位を築き



三階



二階



一階

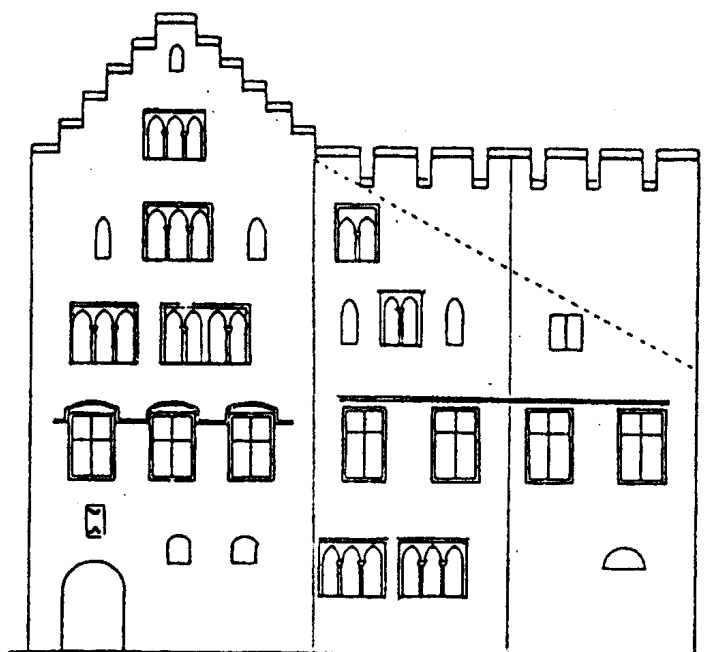


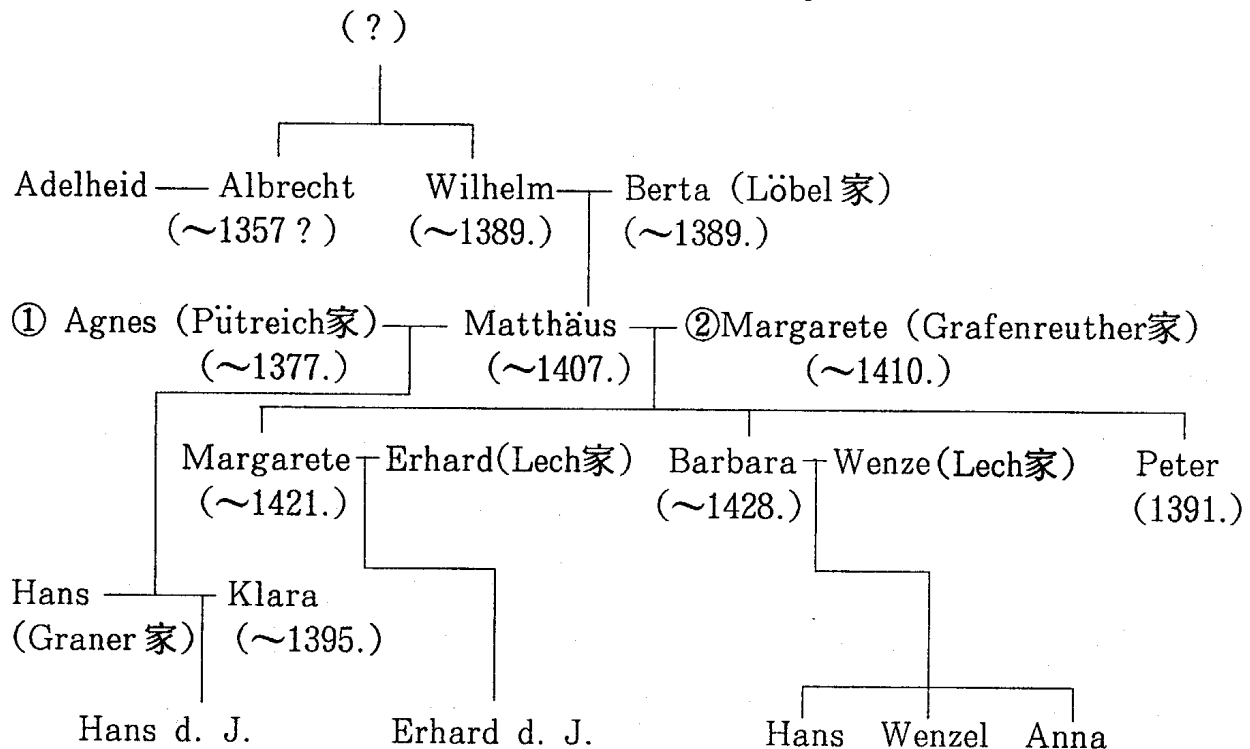
図2. 1400年頃のルンティンガー家の住居とその内部構造

〔典拠〕 W. Boll, Zur Baugeschichte des Runtingerhauses in Regensburg.

Plan 3. (in : Eikenberg, *op.cit.*)

あげた「家」と考えられる。⁶⁾ ヴィルヘルムはルンティンガー商会の創始者であり、それを拡充したのが息子のマテウスであった。この商会はもっぱらこの父子によって運営された。親類縁者が出資したり、一緒にこの商会で働くなどして経営に係わっていた形跡はみられない。父が存命中（父子の共同経営時代）には、息子のマテウスは商会の共同出資者であると同時に、父の下で働く手代でもあった。父の死後（1389年以降）は、同商会はマテウスの単独経営となる。

息子のマテウスは二度結婚している。最初の妻はミュンヘン一番の富裕な都市貴族ピットライヒ家 Pütreichの娘アグネス Agnes である。彼女は一人娘クララ Klara を残して早くに死去した。後妻はレーゲンスブルク市の都市貴族で、富裕なワイン商人であるグラーフエンロイター家 Grafenreuther の娘マルガレーテ Margareteであった。このグラーフエンロイター家との結びつきによって、マテウスは多くの官職を手にいれ、商会の地位を不動のものにした。彼は自分の娘たちをも市内の大商人の家に嫁がせている。⁷⁾ しかし、不幸にして、彼には跡取りが授からず、1407年7月のマテウスの死によって、同商会は僅か二代で絶えてしまった。娘の嫁ぎ先との関係は、ときどき娘婿に仕入れなどを委託する程度で、商会の強化・発展に役立つものではなかった。



以上のように、ルンティンガー家は、紛れもなく都市の最上層に位置する大商人の家であった。このことは、この都市の14世紀後半が「ルンティンガーの時代」と呼ばれることにも表れている。⁸⁾

ところで、ルンティンガー商会の商業活動であるが、同商会の遠隔地商業活動は①ヴェネツィア貿易、②プラハを中心としたボヘミア貿易、それに③ブラバント・フランクフルト貿易などに大別される⁹⁾(図3を参照)。

まず、①ヴェネツィア貿易であるが、同家は1383～85年の各年、および1395年そして1398～1400年の各年にヴェネツィアやルッカなどに赴き、木綿・絹織物・胡椒・サフランなどの商品の仕入れに係わっていた。これらの商品は、レーゲンスブルク市の代表的な産業(バルヘント織物)の原料である木綿を除けば、おもにプラハで売却されていた。②プラハ貿易では、同家は1383/85年にプラハに赴き、上記のレヴァント産商品の他にレーゲンスブルク産のバルヘント織物の売却に、また木綿の仕入れに努めていた。しかしレーゲンスブルクを中心とした都市同盟と諸侯連合の対立の激化に伴って、交通・運搬手段の確保が不可能となり、1387年に同家は一時的にプラハ支店を閉鎖した。プラハ支店は1395年に再開されるが、国王ヴェンツェルWenzelの退位(1400年)によって、もはやプラハは奢侈品の大消費地としての魅力を失い、同家は1402年以降プラハから完全撤退した。¹⁰⁾③ブラバント地方との直接的な毛織物取引は、1395年に限られていた。何故なら、1401年にレーゲンスブルク市がフェルツ伯アルプレヒトを支持したみかえりに、同市民は同伯の勢力下にあるフランクフルト市での護衛特権を享受し、この大市で安全かつ安定的にブラバント産の毛織物を購入することが可能となったからである。¹¹⁾

他方、同家(特に、マテーウス)は、多くの官職・名誉職を手にいれたが、そのなかでも特に本稿に関係するのは、貨幣鑄造業Münzamtと両替業Wechselamtである。1392年にレーゲンスブルク市の参事会がバイエルン大公から貨幣鑄造権を獲得、これを市内で最も資金力のある2人の市参事会員マテーウスとプロイマイスター家Preumeisterに委嘱した。マテーウスは死去するまでこの職に留まっていた。¹²⁾

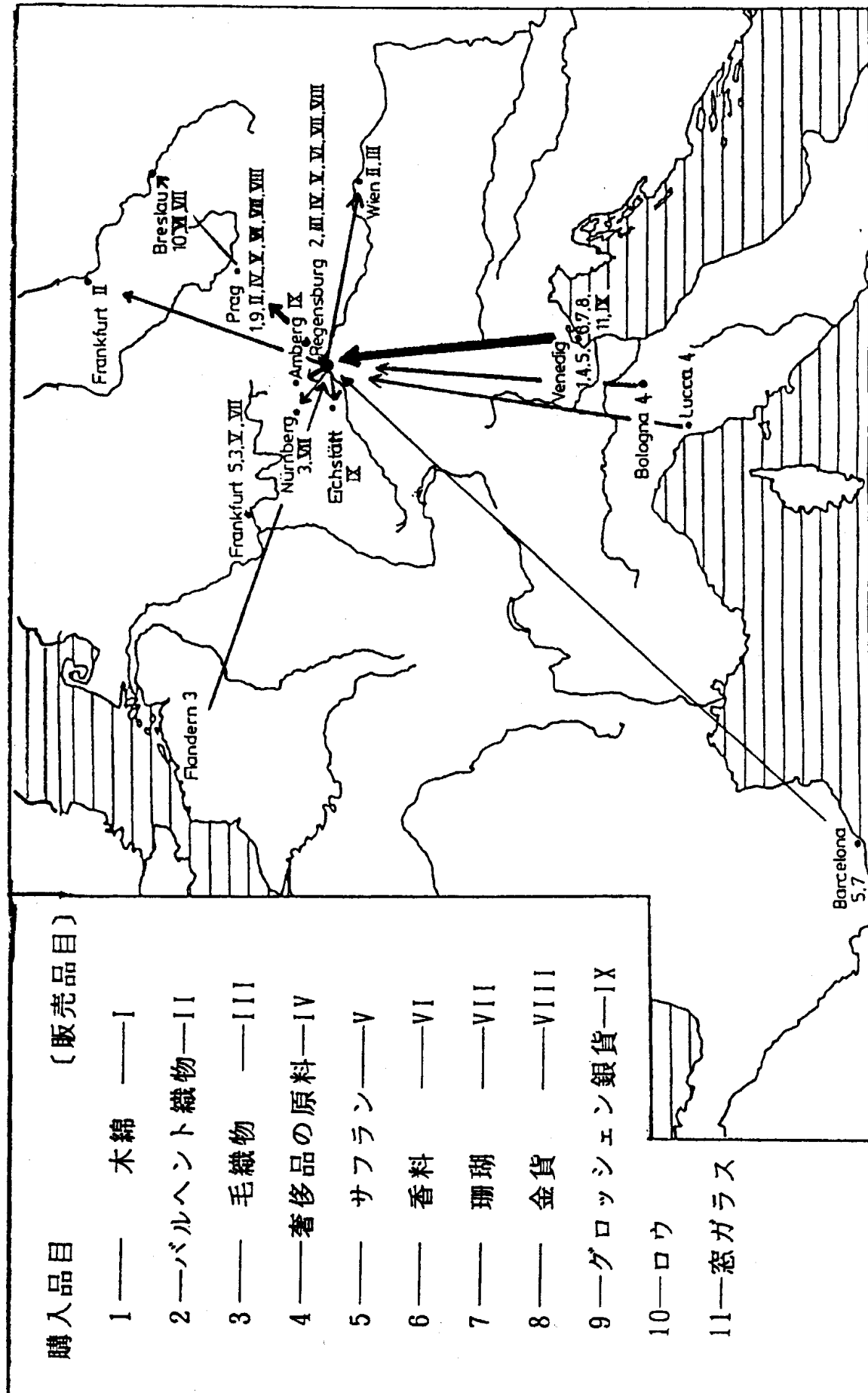


図3. ルンティンガー家の交易範囲と取引商品 (1383~1407年)

〔典拠〕 C. Gödel, *Handel und Geschäfte der Regensburger Firma Runtiger*, 1986, S. 43. の図に筆者が加筆。

(2) ルンティンガー商会の奉公人の種類

前述のような商業活動に従事していたルンティンガー商会には、どのような種類の奉公人が存在し、また、その人数（規模）はどの程度のものではあったのだろうか。『帳簿』からは、以下の4種類の奉公人が存在していたことが判る。すなわち、

1. 手代 : Diener

Dienerという用語は、広くは「家」で働く男子奉公人全体を指す。『帳簿』中で Diener と表記されている者は、プラハ支店の支配人から馬丁にいたるまで様々である。¹³⁾しかし、ここでは仕事の内容によって、商業活動に直接係わる者とそうでない者とは大別し、前者を商業奉公人＝店表奉公人 Handlungsdienner とする。これは、いわば商家の手代であり、このような Diener を一応、手代と仮訳する。その仕事内容、その他詳しいことは次章で検討する。

2. 下男 : Knecht

『帳簿』の中で馬方 (marstaller, roscheht)¹⁴⁾などと記載されているものを下男と規定する。つまり、店表での商業業務に直接、従事していない非営業的雇人——狭義の奉公人である。『帳簿』の中で確認できる人数は7人である。その仕事の内容は、主人の旅のお供、馬の交換・手配などである。

3. 下女 (家事奉公人) : Magd

「家」の奥で、家事労働に従事する女子奉公人であり、『帳簿』には2人現れる。そのうちの1人は Agnesという下女で、彼女は「肉を買うため」に、また「食料品市場に」行くために、主人から金を受け取っている。¹⁵⁾このことは、彼女が主人の「家」のために買物をしていたことを意味しており、明らかに、彼女は同家の台所を任された家事奉公人であった。

4. ワイン販売人 : Weinschenk

この者は、ルンティンガー家が所有するブドウ園で採れたブドウで作られた自家製ワインの販売を仕事とする。¹⁶⁾『帳簿』に現れるのは、1人である。

以上が『帳簿』から窺えるルンティンガー商会の奉公人たちである。それでは、これらの奉公人を同商会はどの程度雇用していたのだろうか。

まず、手代であるが、ヴィルヘルム存命中（～1389年）は、息子のマテウスも手代として参加していたが、彼を含めて2人、多い時でも3人であった。¹⁷⁾ 下男下女については史料に現れない者もいたと思われるので、詳細は不明である。しかし、記載されている者だけを対象にすると、下男は3～4人、下女は1～2人と推測される。またワインの小売り人は1人である。したがって、ルンティンガー商会の奉公人は全体で、多い時で8～9人、少ない時で4～5人だったと思われる。ここで、ルンティンガー家の規模が市内でどの程度のものであったのかを知るために、他の「家」と比較してみる。マテウスの長女クララの嫁ぎ先はグラナー家である。同家は市内の都市貴族で富裕なワイン商人であった。1370年の租税台帳によれば、同家の当主はオットーOttoで、彼は同じドナウ地区の繁華街ハイド＝グリュープ通りに居を構えていた（図1および表1の街区⑧）。ここには、家族の他、同居人が5人、書記（代書人）schreiber が2人、手代dyenerが2人、給仕chellnarが1人、馬丁marstaler 1人、馬方menchnecht 3人、料理人choch 1人、ワイン販売人Weinschenk 1人である。すなわち、雇用されている奉公人は11人である。¹⁸⁾ 同家は1383年の納税申告額が3000ポンドに達していること、また娘の嫁ぎ先であるという点を考えると、グラナー家とルンティンガー家とはほぼ同格・同規模の「家」であったと思われる。しかし、同年のルンティンガー家に同居していた奉公人は僅か4人（後述の125～126頁を参照）にすぎない。おそらく、同家はまだ上昇途上にあったのかもしれない。また営業的雇人に関して、同家には特別な書記（代書人）がいない。これは、同家では手代が書記を兼ねていたこと、またマテウスの後妻マルガレーテが帳簿付けを手伝っていたためである。¹⁹⁾

ルンティンガー家は、比較的少ない人数で大きな商取引を行っていたわけだが、上記の奉公人以外にも多数の人びとを雇って商業活動を営んでいた。第一に、委託仲買人Kommissionareと呼ばれる者たちの存在である。彼らは大金・商品を任され、同家に代わって外国での仕入れ・販売、銀行業務、代金の取立てなどを行っていた。²⁰⁾ 彼らは委託される仕事の内容、諸経費（商旅の旅費・宿泊代・食費等）の支給などの点では、手代とほとんど変わらない。ただ、手代が年季契約

で給金を得ていたのに対して、仲買人はそれぞれの取引毎に報酬を得、また委託契約も一回毎に結んでいた。第二に、外国などでの商業活動に伴う送金・書簡の郵送のために飛脚 Bote が、また商品輸送のために運送業者 Fuhrmann が雇用された。²¹⁾ このように、「家」の常雇いの奉公人ではなく、必要な時に一時的に雇われる、いわゆる賃金労働者たちが同家の商業活動を側面から支えていたのである。

なお、商業活動以外のために、雇用されていた者も存在する。前述のように、マテウスは都市の貨幣鑄造業を委嘱されていた。そのため、彼は貨幣鑄造業者 Münzmeister とその職人 Geselle を雇用して、レーゲンスブルク貨幣を鑄造させていた。また、彼は都市周辺部に所有していた数カ所のブドウ園の経営のために、それぞれブドウ栽培人を 3 年契約で雇用していた。²²⁾

以上のように、ルンティンガー家では、父子が中心となって商業活動を行い、血縁関係者による営業部門への参加は見られない。奉公人は、営業的雇人＝店表奉公人と家事奉公人の二種類に大別され、それぞれの分野でルンティンガー家の経営を支えていた。すなわち、商家の経営は「家」内部の重層的な二重雇用労働（①店表の営業的奉公人と②奥向きの家事奉公人）を基礎としながらも、国際的取引を主とする遠隔地商業においては、必要に応じて「家」を超えた、外部の多数の人びと（例えば、委託仲買人など）に支えられて営業を行っていたのである。²³⁾

次章では、実際に商業活動に係わっていた手代の実態について詳しく検討する。

- 1) ルンティンガー家の財産等については、さしあたり、Eikenberg, *op.cit.*, S.19～20.
- 2) *ibid.*, S.20-21
- 3) *ibid.*, S.22. および、RB.III, A.Nr. 2. (S. 4-5.)
- 4) *ibid.*, S.21, 24～25.
- 5) RB.III, A.Nr. 8. (S. 8-9.) なお、掲載した同家の見取図は、1400～1440年頃のものである。これは、1399年に隣を買い取り (RB.III, A.Nr.57.) 増改築した建物であり、ここが本店となった。Boll, Walter, *Zur Baugeschichte des Runtingerhaus in Regensburg*, in : Eikenberg, *op.cit.*, S.325～335. の Plan 3. より借用。
- 6) Eikenberg, *op.cit.*, S.23-25. ルンティンガー家の出身地について、アイケンベルクは、1365年と1378年にヴィルヘルムとその妻がカム Cham の市参事会と都市共同体に同地での終身年金 (Leibgeding) を処分していることから、なんかの関係があった

のではと推測している。RB.III,A.Nr. 6. (S. 7.) ,Nr.23. (S.18.)

- 7) *ibid.*, S.28-32.同家の家系図については、RB.II,S.21.を参照。なお、1391年頃の『帳簿』によると、マテウスには確かにペーターなる息子が誕生したが、この子はまもなく死亡した、と記されている。その後の記録は一切、この息子について言及していない。また、伯父アルプレヒトの家にも跡取り（息子）が授からず、結局1407年に同家は二世代で断絶した。
- 8) Bosl, *op.cit.*, S.101.
- 9) Eikenberg, *op.cit.*, S.69-119. および Göldel, Caroline, Handel und Geschäfte der Regensburger Firma Runtnger, in : *Scripta Mercaturae*, 20. Jahrgang, Heft 1 / 2. 1986, S.37-46. なお、図3はS.43より借用。
- 10) 当時のボヘミアでは、ドイツ人とチェク人との対立が、特に宗教をめぐって激化しており、レーゲンスブルク商人たちもボヘミア入国が困難になっていた。ルンティンガー家もプラハでの営業活動で大きな損害を被っていた（Göldel, *ibid.*,S.40-41.）。
- 11) *ibid.*,S.41.
- 12) *ibid.*,S.47-49. Eikenberg, *op.cit.*, S.52-56.
- 13) RB.III,Sachen und Personen Register,S.223-446.
- 14) Eikenberg, *op.cit.*, S.183-184.
- 15) RB.II,S.402 (54 R.Pfennige) ,416 (3 Schilling) ,428 (3 Schil. 10. helbling) .
- 16) Eikenberg, *op.cit.*, S.183.
- 17) *ibid.*, S.168.
- 18) RUB.II, Nr.906, Donauwacht (S.361) .
- 19) Ennen, Edith, *Frauen im Mittelalter*, München 1984,S.184-186.
- 20) Eikenberg, *op.cit.*, S.190-204.
- 21) *ibid.*, S.184-185.
- 22) *ibid.*, S.185-186.
- 23) RB.III,A.Nr.36 (S.28) .
- 24) Schneider, Jürgen, Die Bedeutung von Kontoren, Faktoreien. Stützpunkten (von Kompaghien) , Märkten, Messen und Börsen in Mittelalter und früher Neuzeit, in : VSWG, Beiheft, Nr. 87, 1989, S.41~43.

第三章 ルンティンガー家の手代（店表奉公人）

ルンティンガー家の『帳簿』に現れる店表奉公人たる手代は、次の6人である。¹⁾

- ①ウルリッヒ・フルター Ulrich Furtter : 1381~1386年
- ②アルプレヒト・フロナウアー Albrecht Fronauer : 1383~1384年
- ③ハンス・エルンスト Hans Ernst : 1386~1401年（死亡）
- ④エルハルト・レッテル Erhard Lettel : 1395~1407年7月（主人の死去まで）
- ⑤リーンハルト・ランクアイダー Lienhard Lanquaider : 1400~1404年
- ⑥ハンス・レッテル Hans Lettel（エルハルトの兄弟） : 1402~1407年4月

このうち、エルハルト・レッテル④は1397年10月から一年間、同商会にはいなかった。表4は、これらの手代の雇用時期と商業活動の拠点を記したものである。なお、上記の雇用年限は、雇用期間中に死亡したエルンスト③、主人の死去まで勤めたエルハルト・レッテル④、そして暇乞いの記録のあるハンス・レッテル⑥以外は、あくまで史料に現れた年である。

この6人の他に、1375年の時点でペーター・パックハウザー Peter Pachhauser とヤーコプ・ホファー Jacob Hofer という2人の Diener がいた。²⁾ 後者のホファーは1370年からルンティンガー家におり、しかも彼はある程度の財産（84グルデン）を所持し、³⁾ 1383年までに独立していた。したがって、彼は『帳簿』が記録されだす1383年以前の同家の手代であったと思われる。これに対して、前者のパックハウザーに関しては Diener と記されているだけで、その実態は不明である。

本章では、彼ら手代＝店表奉公人の仕事の内容、同商会での地位などについて具体的に検討し、手代の実態を明らかにする。

(1) 手代の仕事内容と権限

ルンティンガー「家」の手代の仕事は大きく二つに分かれる。その一つは、一般的な商家での商業業務、すなわち、商品の仕入れ・販売などであり、もう一つはマテーウスに委嘱された貨幣鑄造職に伴う両替業務である。

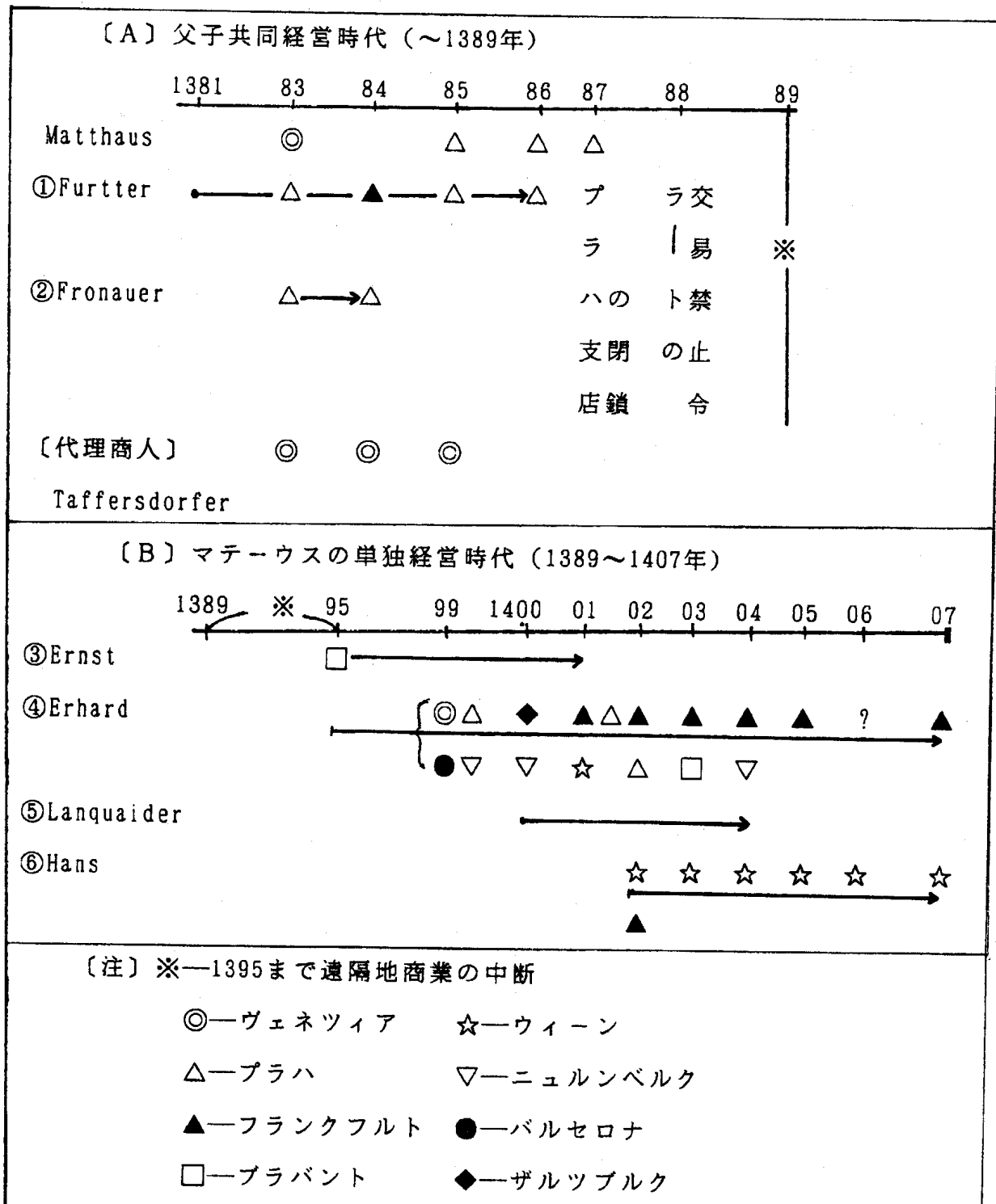


表4. ルンティンガー家の手代の雇用期間と商旅（1383～1407年）

〔典拠〕RB. II, S. 39～243. より作成。

まず、前者についてであるが、確かに、初期の遠隔地商人たちは自ら商品を購入し、隊列を組んでその商品を運搬・販売するという遍歴商業に直接従事していた。しかし、商業の仕方そのものが、遍歴商業から帳簿に基づく定着商業に変わった中世後期においては、⁴⁾商業都市に定住した有力商人は商旅せず、総支配人として「家」に留まり、各地に開設した支店（「家」の奉公人）や代理店（仲買人）に商品の仕入れ・販売を委託・指示していた。ルンティンガー商会で商業業務に従事していたのは、上記6人のうちフルター①、フロナウアー②、レット兄弟④・⑥の4人である。そのうちの前者2人（①・②）は父子共同経営時代（1383～1389年）の手代であり、後者2人はマテーウスの単独経営時代（1389～1407年）の手代であった。

〔A〕共同経営時代の手代の実態

まず、フルター①であるが、彼はレーゲンスブルク出身者で、もっぱらプラハ支店で活躍していた。彼が主人ヴィルヘルムから委託された職務内容は、次の史料から判る。⁵⁾すなわち、

「フルター 1383年

私と私の息子マテーウス・ルンティンガーは、私たちの手代であるウルリッヒ・フルターと、すべての商品、彼が私たちのために稼いだすべての金銭、彼が私たちに返却するもの、あるいは彼が私たちの代わりに支払ったものについて清算した。それはすべて聖霊降臨祭の週の木曜日に清算された。その時、私たち双方の間で清算された。

私たちは、聖霊降臨祭の週の木曜日に、再びウルリッヒ・フルターに、私たちがボヘミアに持っているすべての商品、金銭、（未回収の）代金を信用して任せた。」

そしてこの後に、プラハ支店の在庫品（ビロード・レンガ色の絹織物・ミラノ産のファスチオン織物など）、貴金属（真珠・銀製の皿など）、現金、そしてプラハでの顧客の未回収代金のリストが続いている。

フルターはプラハに常駐し、ルンティンガー商会から運送業者を通して送られてきた商品を管理・販売していた。その商品とは、この当時父ヴィルヘルムの許

で手代として仕入れ部門を担当していたマテウスが、ヴェネツィアなどで購入したビロード・絹・香料などのレヴァント商品とレーゲンスブルク産のバルヘント織物であった。また、彼はその売上代金を飛脚などを通して定期的にレーゲンスブルクの主人の許へ郵送していた。その他に、かれは約半年ごとに本店に赴き、彼が記録したプラハでの会計帳簿に従って上記のように主人との間で清算した。この時、彼は主人からプラハでの今後の営業指示をも仰いでいた。⁶⁾ このように、フルターはプラハにおける営業の全責任を任されており、いわばルンティンガー商会プラハ支店の支配人という地位に就いていた。

このプラハ支店には、彼の他にフロナウアー②が雇用されていた。⁷⁾ 彼はレーゲンスブルク市から北東52kmに位置するカムChamの出身者である。彼は、同家が1383年にヴェネツィアで大量に商品を仕入れ、プラハでの販売量が伸びた1383～84年の一年間だけ雇用された中途採用者であった。彼が本店に行った形跡はない。また、彼には商品販売契約を自由に結ぶ権限は与えられていたが、その商品を発送する権限は無かった（商品の発送権限は支配人たるフルターのみに付与）。⁸⁾ このように、2人の権限には明確な相違があり、フロナウアーは支配人たるフルターの下で働くという構図が読み取れる。

[B] マテウスの単独経営時代の手代

ヴィルヘルムの死後（1389年以降）、マテウスが総支配人となると、レーゲンスブルク市出身のレッテル兄弟がルンティンガー商会の仕入れや販売などの業務を引き継いだ。この時代には、従来の取引の他に、新規に開発したブラバンド貿易なども開始され、同家の都市内での立場は一層強固なものになった。

こうしたなか、エルハルト④は1395～1407年まで雇用され、おもに織物を中心として様々な商品をブラバントや南ドイツで仕入れ、これらの商品をウィーンやレーゲンスブルク市内で販売するという営業活動に従事していた。その他、彼は、バルセロナでは珊瑚、ヴェネツィアでは金貨や香料・サフランなどを仕入れ、これらをプラハ、ブレスラウ、ニュルンベルクなどで販売するという新規事業をも⁹⁾積極的に展開していた。つまり、エルハルトは広範な地域で幅広い営業活動を任された手代であり、しかも仕入れに際して自由裁量権を与えられていた手代でも

あった。このことは、彼がその当時、外国の市況動向および貨幣・商品知識を身につけ、また主人から全幅の信頼を得ていた有能な手代であったことをも示している。したがって、エルハルトには、前述のフルター①同様の、あるいはそれ以上の権限が与えられていたのかもしれない。

兄のエルハルトがヨーロッパ各地を飛び回って取引活動をしていたのに対して、弟のハンス⑥はおもにウィーン織物の販売を手掛けていた。¹⁰⁾彼は週・月単位で、あるいは1年もの長きにわたって、ウィーンに滞在して販売に従事していた。ただし、ハンスの取引活動は彼が販売契約を結ぶごとにレーゲンスブルクの本店に戻って主人と清算し、次の販売商品を受け取って再びウィーンに引き返す、という性格のものであった。この点から、同じ取引活動に従事しているとはいえ、定期的な清算でよかったプラハ支店の支配人フルター①と比べると、ハンスの営業上の権限は小さかったと思われる。ほぼ同じ時期、同じ主人に仕えた兄エルハルトと比べても彼の権限は著しく小さいものであった。

このように、一口に主人から委託された仕入れ・販売業務に従事している手代とはいえ、各手代によってその委託の仕方、権限に差が設けられていた。この差が何に基づくのか、この点を少し考えてみたい。

手代が営業的雇人、そして技能労働者である限り、各人の能力によって仕事上の地位に差があるのは当然であろう。彼らの技能とは、商品・度量衡・為替・通貨・各地の市況の動向などの商業知識および外国語に関する知識、それから基本的な読み・書き・算盤（計算力）の能力である。こうした知識はおもに経験によって取得されるものである。南ドイツの商人の息子たちは一般に、イタリア、例えばヴェネツィアに赴き、そこで数年間手代としての技能を習得・修業した後、自分の家にもどって「家」を継いだり、あるいは独立したりしていた。¹¹⁾また、手代は大金や高価な商品を預かることから、能力以外に主人との信頼関係も不可欠であった。それは、主人と同じ出身地とか、また主人との付き合いの長さ（奉公の年数）などにも関係があったろう。こうした点を考慮すると、手代間の権限の相違は各人の経歴（キャリア）の差に基づいていたといえよう。『帳簿』には手代の年令もその過去の経歴も記載されていないので、正確なことは判らない。しか

し、同商会に雇用されていた各人の年数などを手掛かりに推測することはできる。

この点で、経歴が最も明確な人物は、エルハルト④である。彼が『帳簿』に現れるのは1395年で、1396年から彼は両替業務を任されている。仕入れ・販売を委託されて、初めての商旅に出たのが1399年3月であり、その旅先はヴェネツィアであった。これは、彼がルンティンガー商会に雇用されてから実に4年後のことであった。しかも、この場合でも彼はまずヴェネツィアの仲買人タッフェルスドルファー Taffersdorfer の許に赴き、それからこの仲買人と一緒にバルセロナ¹²⁾に向かっていた。この、お目付け役（相談役）との同伴商旅という点を考慮すると、エルハルトにとってのこの4年間はおそらく商業活動に必要な知識の習得期間であったのではないだろうか。何故なら、彼の父親はドナウ地区「ただし、対岸のオーベレ＝ヴェールト（島）」の漁師であるので、彼が自分の家で商業知識のすべてを会得していたとは考えにくいからである。とすると、彼はこのルンティンガー商会に奉公し、手代として商業技能を身につけた1399年に、初めて外国での仕入れ・販売業務に従事することが許された、と考えられよう。このような形で商業取引に係わったエルハルトはやがて同商会で働く手代のうちで「最も優秀な手代」となった。それは、彼が商旅の途中の各関税所での税額や、それを回避する迂回コースなどをも控えていた点にも表われている。¹⁴⁾エルハルトは主人のマテウスが死去するまでの12年間、同商会で働き、財産を増やした後に独立した。独立後に彼は都市官職をも獲得している。¹⁵⁾彼のこのような経歴（キャリア）の積み方は、日本の商家での、丁稚奉公から勤め上げた後に暖簾わけを許した「内部昇進」¹⁶⁾型のそれと類似している。中世後期のドイツでも、少なくとも大店では「内部昇進」によって特徴づけられる雇用制度が存在していた。

このエルハルトと類似した経歴を経ているのが、プラハ支店の支配人フルター①である。『帳簿』に記されている限りでは、彼が同商会にいたのは1381～86年の5年間である。しかし、第一章で扱った1370年の租税台帳にそれらしき人物が記載されている。すなわち、ドナウ地区のドナウ街区「図1、表1の⑩」のルンティンガー家「図2」に、

「Datz dem Rontinger (ルンティンガーの家に) : Frid. weinschenkch,

Ulr. und Jacob diener (ウルリッヒとヤーコプ、ディーナー) : Matz dirn.]¹⁷⁾ が居住していると記載されている。ここには「ルンティンガーの家」と記されているにもかかわらず、妻子が明記されていない。そのため、ルンティンガー家の家族はここに居住していなかったという解釈も成り立つ。しかし、同家が1367年に購入した初めての家屋は、その両隣りの家の名からして、まさしくドナウ街区のこの家である。それ故に、ここに家族が上記の奉公人と一緒に住んでいたと思われる。このウルリッヒがウルリッヒ・フルターではないか、とアイケンベルクも述べている。¹⁸⁾ もちろん、この名前はごくありふれたものなので断定はできない。しかし、新規採用の奉公人に、いきなり自分の目の届かない外国支店の営業全般を任せたくえ、その監査も半年に一度程度しかしない雇主などはいないであろう。事実、1年間の臨時雇いのフロナウアー②の場合には、雇主のマテウスは年に4回、おそらく監視の意味をもこめてプラハを訪れている。また、フルターがルンティンガー家と親類あるいは同郷人であるという記録もない。そうすると、フルターはかなり以前から同家に仕えていた奉公人である、と考えるのが自然であり、前述の1370年に現れたウルリッヒがウルリッヒ・フルターであるという可能性は高い。もし、このことが事実で、さらに彼が1370年から1381年まで継続して同家に奉公していたと仮定できるならば、フルターは実に16年以上もの間ルンティンガー商会に奉公していたことになる。彼も独立後の1389年頃までにレーゲンスブルクの市民権を取得し、さらに市参事会に参加するまでになっていた。¹⁹⁾ これらの事実を考慮すると、フルター①もエルハルト④同様、ルンティンガー商会に奉公して仕事の段取りを覚え、やがて一人前の商人になって独立していった、という図式が浮かんで来よう。

残りの2人は、明らかにこれとは異なる経歴をもっている。まずフロナウアー②は、前述したように、仕入れ量の増加に伴って販売業務の人手が足りなかった時期に中途採用された者である。また、ハンス⑥はおそらくエルハルト④の兄弟という縁故採用者であった。ハンスは雇用初年次から仕入れ・販売業務を委託されて商旅に出されているので、彼はある程度、商業知識を得ていたと思われる。

こうしてみると、手代は、商家の中で見習い(丁稚)時代から徐々に仕事を覚

えた、つまり商業的技能を取得していった子飼いの者と、すでに技能を会得して、いわば中途採用という形で商家に雇用される者との二種類に大別できる。

次に、ルンティンガー家のもう一つの重要な業務であった両替業務に従事する奉公人はどうであったのだろうか。また、上記の店表の商業奉公人は両替業務とどのような関係にあったのだろうか。

すでに第二章で言及したように、マテーウスは都市官職の一つとして貨幣鑄造業と両替業を営んでいた。そのため、同家は貨幣鑄造内に両替台 Wechseltisch あるいは両替所 Wechselbank を設置し、そこで信用のない貨幣の回収・交換、さらには外国貨幣の両替、貴金属の交換といった両替業務のために奉公人を雇用していた。マテーウスはこの両替所の管理を手代にはぼらせていた。その記録が手形勘定 Wechselrechnung である。しかし、実際には、主人は家に金がない場合に、ここから現金を都合していた。²⁰⁾それ故に、ここでの両替帳簿はしばしばルンティンガー家自身の会計簿という性格を色濃く帯びていた程であった。この帳簿はある程度の期間ごとに区切られ、次のような形式で記録されている。²¹⁾

すなわち、

「1396年 レッテル 両替

私は、聖燭祭の前の聖霊降臨祭の日に、エルハルト・レッテルを貨幣鑄造所の下の両替台に配置した。

私は、同日、20新ハンガリー・グルデンと、10ライン・グルデンと、2ポンドのレーゲンスブルク・ペニヒそして1ポンドのアンベルク・ペニヒを彼に任せた。」そして、区切りの所で、その期間の貸方・借方の合計を記入する。

この両替業が開始されたのがマテーウスの単独経営時代の1392年であるため、共同経営時代に雇用されたフルター①やフロナウアー②の記録はない。したがって、両替所を任せられた手代はもっぱら単独経営時代の手代たちである。エルハルト④の他、エルンスト③ランクアイダー⑤それにハンス⑥である。これらの手代は少なくとも一度はこの業務に就いていたことから、商品の仕入れ・販売を委託されていた手代は両替業（貨幣知識）を熟知していたことになる。このような点を考慮にいれて、両替業務に従事していた2人の手代の経歴を推測してみる。

まず、エルンスト③は、15年の奉公期間のうち一度だけ仲買人リープライン・リングハイムと一緒にブラバント商旅の経験を持つだけで、ほとんど両替業務専従の手代であった。彼には外国に派遣されるだけの主人からの信頼がなかったのかといえ、逆であり、商旅の時に1200グルデンという大金を任されていたので、主人の信頼は厚かったと思われる。また、彼は両替業務の性格から、読み・書き・計算、貨幣、それに帳簿付けなどの知識を会得していたものと思われる。このエルンスト（1401年7月に死亡）に代わって両替業務に就いたのが、ランクアイダー⑤であった。彼はレーゲンスブルクから南西22kmに位置するラングクアイド Langquaid の出身者である。彼が就任していた期間は1401～1403年4月までであった。おそらく、彼の母が雑貨商であり、貨幣に関する知識を得ていたための抜擢であったと思われる。ただし、彼は、この前後において、本店の金庫と支店（手代）との間の送金業務に従事する配達夫として『帳簿』には記載されている。²⁴⁾このような配達業務は下男のマーティンも行っている。²⁵⁾このことから、手代とはいってもまだ見習い（丁稚）で使い走りをやらされていたランクアイダーが、エルンストの死去によって一時的に両替業務に大抜擢され、そして1403年4月以降再びもとの配達業務に戻った、と考えられよう。また、前述のエルハルト④が商旅に出る前にこの両替業務に従事していた事実を考慮するならば、子飼いの手代は使い走りや帳簿付けから始めて、両替業務や商品の仕入れ・販売業務を通して様々な実践的経験を経、その後、本人の努力次第で独立する、というコースを歩んでいたことになる。このような商家での「内部昇進」コースは、特に子飼いの店表奉公人（手代営業的雇人）の雇用制度の特徴の一つであった、といえる。

以上、ルンティンガー家の手代の仕事と権限を、その内容と彼らの経歴からみてきた。そこから判ることは、次の諸点である。すなわち、ルンティンガー家の手代の仕事には、労働の質や熟練度を異にする多様な業務（使い走りから外国での仕入れ・販売まで）があったこと。またその雇用期間と雇用の仕方から、同じ手代とはいえ、10年を超える長期雇用の子飼いの手代と短期雇用である中途採用の手代の二種類がいたこと。しかも、前者の子飼いの手代はおもにレーゲンスブルク市の出身者であったのに対して、後者は同市以外の他所者であったこと。そ

して、当時の商家ではまず手許で見習い時代から商業的技能を教え込んだ子飼いの手代を中心にして営業にあたり、必要に応じて、商業的技能を備えた者を中途採用という形で雇用して対処していたこと、などであろう。

この点から、第1章の第3節で述べておいた市内商業地区での商家の奉公人は、都市周辺の農村部よりも、中心〔商業〕地区と比べて子供の数が多かった同市の周辺地区（手工業地区）から供給される割合が多かったのではないだろうか。すなわち、商家の子飼いの奉公人は都市出身者が多かった、と。なお、この点については、次節で再度言及する。

（2）手代の給金と家族

次に、手代たちの給金などの分析を通して、雇主と手代、特に上記の二種類の手代との関係を明らかにする。

手代の雇用契約は普通、年季制であり、給金は固定の年給Jahrlohnであった。ただし、給金は必ずしも各年ごとに支給されたわけではなく、手代によっては貸し勘定（主人にとっては借り）として取り扱われ、数年分まとめて支給されていた。

まず、プラハ支店勤務の子飼いの手代フルター①については、1383年5月28日の記録²⁶⁾から読み取れる。すなわち、ヴィルヘルムは、「彼が私たちの許で得たものと2年半の彼の勤め」を勘定すると、「彼にはまだ162 グルデンの借りがある」と述べ、その後続けて「私はフルターに聖ニコラスの日（12月6日）までの半年分の彼の給金として20グルデンの借りがある」と記している。これによると、彼の給金は半年で20グルデン、一年で40グルデンということになる。したがって、2年半では100 グルデンに達し、上記の162 グルデンとは62グルデンの差がある。この金額がまさに「彼が私たちの許で得たもの」なのだが、その詳細は不明である。²⁷⁾彼はこの固定給金の他に、主人からかなりの賄い費（プラハ滞在の食費・宿泊代）をも得ていた。

次に、同じくプラハに勤務していたが、一年間の中途採用者であった手代フロナウアー②は、1384年11月に147グルデンを受け取っていた。²⁸⁾すなわち、

「聖アンドレアスの日（11月30日）に、私の息子（マテウス）はプラハで私

たちの手代であるアルプレヒト・フロナウアーに117 グルデンを与えた。それは、彼が以前私たちに預けたものである。そして30グルデンを給金と Zins として彼に与えた。合計で147グルデンである。」

雇主ヴィルヘルムは、1383年に彼を中途採用した時、フロナウアー自身からまず60グルデンをさらに半年後に57グルデンの金銭を受け取っている。アイケンベルクは前者の金銭を主人に対する保証金、後者を主人の事業への出資金と推測している。²⁹⁾これによると、彼の1年分の「給金と Zins」は30グルデンである。この Zins は、彼が主人の事業に資本投資をしていた可能性があることから、投資資本に対する配当金である、との推測も成り立つ。ただし、詳細は不明である。ここでは、一応彼の給金を30グルデンとする。

その後の単独経営時代の手代については、『帳簿』に「～に年給して与える」(ich gabe～für seine jahrlohn) という形で現れる。エルハルト④については、1397年の3／4年分の分割払いの一部として、1／2 ポンド16ペニヒ（約2グルデン）と、また1404年から3年間毎年4 ポンド・ペニヒ（約13グルデン）と記されている。³⁰⁾また、ランクアイダー⑤の給金は一度だけ、すなわち1402年に3 シリング・ペニヒ（約5グルデン）と記されている。³¹⁾ただし、エルンスト③とハンス⑥に関する給金の記録はない。

ここで、各手代の給金を比較してみる。まず、好対照をなすのが、同じプラハ支店勤務のフルターとフロナウアーである。両者はほぼ同じ金額の滞在費（食費＋宿泊費）を支給されていたが、給金に関しては支店の支配人で子飼いの手代たるフルターの方が10グルデン多い。しかし、フロナウアーも中途採用者ながら30グルデンという高額を得ている。この点から、彼はかなりの商業的知識を身につけた一人前の即戦力を備えた手代であったと思われる。ただし、彼は採用の際に給金の2倍という高額の保証金を要求されている。この点に、一時的な中途採用者に対する雇主側の警戒ぶりが窺われる。と同時に子飼いの手代と臨時（中途）採用の手代に対する雇主（ルンティンガー家）側の異なる対応を読み取ることができる。この両者に比べて、配達業務に従事していたランクアイダーの給金は5グルデンと極めて低い。ちなみに、この5グルデンという給金は、例えば、下男

ヴィレンデルWirendel の給金5グルデン、下女たちの給金3グルデンと比べても大差ない。³²⁾

なお、同商会の「最も優秀な手代」エルハルトの給金がフルターやフロナウアーのそれと比べて小額であるのは、彼が手代として雇主の利益でのみ奉公していたのではなく、主人との共同事業への出資者として彼独自の利益で働いていた（この場合には、給金は支払われない）³³⁾からに他ならない。

最後に、これまで述べてきた都市での商業業務に従事する奉公人（手代）の在り方を、彼らの家族（妻子）という観点から再度、検討する。

冒頭でも言及したように、これまで一般には、最も典型的な雇用形態とされる年季奉公人は独身者として雇主の世帯内に住み込み、雇主の「全き家」の構成要素として位置付けられてきた。この命題は、依然として特に、子飼制と内部昇進制とを伴う大きな商家の奉公人には妥当するように見える。しかし、このルンティンガー商会の手代たちのなかには妻帯者が確認できる。例えば、エルハルトには1401年以前にすでに妻がいた。彼女は、オーバーミュンスター教会の出納係の娘で、夫が雇主との共同事業（利益は折半）で仕入れた毛織物を販売していた。³⁴⁾エルンストの兄弟のハンスにも妻子がいたし、³⁵⁾ランクアイダーにも妻がいた。³⁶⁾彼女は、夫が雇主からルーヴェン産の毛織物14エレを購入した際に一緒に名を連ねている。さらに、下男の一入マーティンにも妻がおり、彼女は夫が死亡した後、雇主マテウスから二度ほど金銭（14、9グルデン）を受け取っていた。³⁷⁾ただしフルター、フロナウアー、そしてエルンストについての家族に関する記録はなく、詳細は不明である。また、これらの既婚の奉公人たちがその妻子と共に雇主の家に住み込むには、余りにも人数が多かろう。おそらく、雇主との共同事業に大金³⁸⁾（1402年=270、1403年=290グルデン）を出資していたエルハルトなどは、市内の他の所に居住していた、いわば「通い手代」³⁹⁾であったのではないだろうか。

ここで、レーゲンスブルク市全域〔表1～3〕に調査の範囲を広げると、同様の「通い手代（奉公人）」が多数存在するのに気がつく。すなわち、各地区では、奉公人が1人～3人ぐらいで借家〔表1～3の奉公人の項目中、○で表記〕している。たとえば、ドナウ地区〔街区⑧〕には、ルンティンガー家と姻戚関係にあ

るグラーフエンロイター家の奉公人フリードリッヒが妻と一緒に借家〔大家＝フルモルディン〕住まいしている。またサトラー家の奉公人ハンスも借家〔大家＝ホルントラー〕住まいしている。ただし、史料の制約もあって詳細なことは言えないが、都市内には多くの「通い奉公人」が存在し、雇主の家計とは分離していたように思われる。

- 1) Eikeberg, *op.cit.*, S.168-181.
- 2) *ibid.*, S.181-182. および RB.III, A. Nr.19 (S.15-16).
- 3) RUB.II, Nr. 906 (S.361).
- 4) Rörig, Fritz, Das älteste erhaltene deutsche Kaufmannsbuchlein, in: F. Rörig (Hrsg.) *Wirtschaftskräfte im Mittelalter*, Wien-Köln-Graz 1971, S.167-215. なお、彼は14世紀において商人自らが商品を運搬していたとする見解に対して、当時の商人の実態にあわないロマンチックな見解として斥けている (S.196.)。また、彼の業績については、瀬原義生訳『中世の世界経済——一つの世界経済時代の繁栄と終末——』（未来社、1969年）および魚住昌良・小倉欣一共訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』（創文社、1978年）の訳者解説を参照。
- 5) RB.II, S.52. Furtter in dem 1383.jar. Item ich und mein sun Matheus der Runtinger haben abgerait mit Ulreich dem Furtter, underem diener, umb allew chaufmanschaft und weraitschat, die er von undern wegen eingenomen hat, und waz er uns (?) herwider geben hat oder waz er auzwezalt hat von undern wegen. Daz ist allez abgerait uncz her dez pfincztag in der pfingstwochen, da ward ez sleht zzwischen uns ze peder seit. / Item nu hab wir dem Ulr. Furtter hinwider enpfolchen dez pfincztag in der pfingstbochen allew chaufmanschaft und geltter, di wir ze Pechaim [haben].
- 6) Eikenberg, *op.cit.*, S.168.
- 7) *ibid.*, S.173-174.
- 8) *ibid.*, S.175.
- 9) *ibid.*, S.178.
- 10) *ibid.*, S.180.
- 11) 例えば、15世紀のアウクスブルクの商人の子（ルーカス・レム Lucas Rem）は、14才で修業のためヴェネツィアに行き、3年間手代として、また共同出資者として働いていた。その後彼は家を継がず、兄弟と独自の会社を設立した。
Schuler, Thomas, Familien im Mittelalter, in: H. Reif (Hrsg.) *Die Familie in der Geschichte*, Göttingen 1982, S.31.

- 12) RB.11, S.117,119.
- 13) レッテル兄弟の経歴については、RB.111, Personenregister, S.405-406.
- 14) Eikenberg, *op.cit.*, S.178.およびRB.11, S.129,146-147.
- 15) RB.111, Personenrgister, S.404-407.
- 16) 齊藤修『商家の世界・裏店の世界』（リポート、1987年）94-107頁
- 17) RUB.11, Nr.906 (S.361) .
- 18) Eikenberg, *op.cit.*, S.182.
- 19) RB.111, Personenrgister, S.351-352.
- 20) Eikenberg, *op.cit.*, S.292.
- 21) RB.11,S.275. In dem 1396. jar Lettl weschell.Item ich satz[t] Erhard Lettel an den we[s]chell under die munslawben dez ander pfintztag vor liechtmest. Item ich enpfallg im 20 new Ungerisch gld.und 10 Reini-sch gld. und 2 lb.R.und 1 lb.Amb[er]ger an demselben tag.
- 22) RB.11, S.175-178.および Eikenberg, *op.cit.*, S.177.
- 23) RB.11,S.166.
- 24) RB.111, Personenregister, S.399.および Eikenberg, *op.cit.*, S.180.
- 25) RB.11, S.359.
- 26) RB.11,S. 8 - 9 .およびEikenberg, *op.cit.*, S.169-172.
- 27) アイケンベルクはこの62グルデンの意味として次の三つの可能性を指摘している。
すなわち ①忘れられていた以前の給金 ②共同出資金 ③雇用の際の保証金の意味。
S.170.
- 28) RB.11,S.78. Item ez gab mein sun ze Prag ze sand Anderz tag dem Albr. Fronawer, unsderm diener, 117 guldein, dy er uns enpfolchen het, und gab im darzu 30 guldein fur lon und fur zins, suma 147 guldein.
- 29) Eikenberg, *op.cit.*, S.175-176.
- 30) RB.11, S.313, 423, 428, 430.
- 31) RB.11, S.401.
- 32) RB.11, S.19 (Wirndel), S.319, 320(下女). および Eikenberg, *op.cit.*, S.184.
ちなみに、当時の1グルデンの貨幣価値を比較対照すると、
①単純日雇い人夫の日給の20～25日分 ②手工業者（親方）の嫁ぎの7.5日分
③手代の商旅での一週間分の旅費 ④バター18kg ⑤平均家賃の3ヶ月分
などに相当する（Eikenberg.S.302.）。
- 33) Eikenberg, *op.cit.*, S.179-180.
- 34) RB.11, S.187. Personenregister, S.406. 彼は1411年にオスンナと再婚している。
- 35) RB.111,A.Nr.76 (S.59) およびEikenberg, *op.cit.*, S.181.
- 36) RB.11, S.207.

37) RB.11, S.372, 375.

38) Eikenberg, *op.cit.*, S.150-166.

39) Mittelalter, *op.cit.*, S.10.比較的規模の大きな中世都市では、一戸の建物に数家族（世帯）の借家人が暮らしていた。この点については、表1.～3.を参照。

※なお、同章の作成にあたり、吉村明子さんの協力を得た。ここに謝意を表わす。

おわりに

最後に、これまで検討してきた都市内商家の奉公人、特に手代の雇用状態のまとめを兼ねて、商家の雇用労働力編成や「家」構造を考えてみたい。

中世都市の商家の労働力編成もやはり店表での商業的技能労働者〔手代〕と商業的業務に従事しない非営業的労働者〔下男・下女〕からなる二重構造であった。

前者の店表奉公人はさらに分化しており、①見習い時代から徐々に一人前の商人となるために必要な知識と技能、それに判断力を修得していった。いわば子飼いの手代と②すでに一人前の商業的技能を身につけ、中途採用という形で雇用される手代の二種類が確認される。①は、地元の都市（レーゲンスブルク市）出身者が多く、また内部昇進型の長期雇用関係をその特徴とする。これに対して、②は他所者によって占められ、かつ短期雇用関係を特徴とする。それ故、②から①の子飼いへの転身はかなり困難を極めたように思われる。

とはいえ、②の存在は、商家の「家」経営にとって、少数の子飼いの手代だけでは対処できない場合などには、即戦力として大きな意義を有した。もちろん、商家は、国際的な遠隔地商業においては、これら二種類の手代の他に、「家」を越えた、外部の多数の人びと（例えば、仲買人＝代理人）にも支えられていた。

また、手代は主人＝雇主に終始、従属状態に置かれていたのではなく、時には主人との共同事業に参加して、独自の商売を始めることを許された者もいた。さらには、雇主の家を離れて、借家住まいをする者、さらには妻を迎えて独自の家（世帯）を構える「通い手代」も出現していた。このような点を考慮すると、都市上層に属する商人の「家」は、少なくとも本稿で対象にしたレーゲンスブルク市の商人、ルンティンガー家は、従来考えられていたような「全き家」の範疇と

は異なるのではないだろうか。

最後に、レーゲンスブルク市は、その都市空間的な配置に対応した都市機能を備えた8地区から成っていた。特に、都市中心に位置したドナウ地区など([B]、[E])は外来者を相手にした商業地区であり、男子奉公人が集中していた。これらの奉公人、特に手代の供給源は都市周辺の農村部というよりも、むしろ都市周辺地区〔手工業地区〕であったように思われる。農村部からの都市流入者は商家の下男・下女などの非技能労働者を中心とする都市内での雑業者層を形成していたのである。

Das Handelshaus und seine Diener in der spätmittelalterlichen Stadt Regensburg

Takeshi YAMAMOTO

Die vorliegende Arbeit hat eine Aufgabe, die Zustände der Diener des Handelshauses Runtingers in der spätmittelalterlichen Stadt Regensburg klarzumachen.

Die Regensburger Runtinger haben sich wohl in der ersten Hälfte des 14. Jahrhunderts in der Stadt niedergelassen. Sie haben als wohlhabenden Fernkaufmann mit Tuch und anderen Waren von Flandern und Mittelmeerwelt gehandelt. Sie haben die fremden Waren in den Städte Mitteleuropas, insbesondere Prag und Wien verkauft. Dort unterhielt Sie standige Niederlassungen, von der aus Handlungsgehilfe mit Waren und Aufträgen zum Kunde unterwegs waren.

Dafür haben die Runtinger zwei verschieden Personengruppen als Handlungsgehilfe angestellt. Zum einen solche Personen, die für die längere Zeitraum fest angestellt waren und Jahreslohn bezogen. Zum anderen solche, die oft mit Einzelaufträgen vom Runtingerhaus betraut wurden. Die ersten Gruppe, die in der Quellen fast diener genannt wird, hat die für die Kaufmanns Tätigkeit erforderliche Waren- und Marktkenntnis beim Runtingerhaus gelernt und den Stamm des Runtingerhauses gebildet. Einige von ihr waren vermögend und haben eigenes Kapitel im Runtingerhaus angelegt. Sie haben während ihrer Dienstzeit noch eigene selbständige Geschäfte ausgeführt. So ordnete die Diener ihrem Dienstherrn völlig nicht unter. In diesem Punkt gilt das Otto Brunners Konzept vom ganzen Haus für diese Runtinger nicht.